

本異  
日本繪類考  
卷二

198  
414





198-414

異本日本繪類考卷二

漆山天童著

○格天井繪

格天井は今は多く神社佛寺等にのみ用ひられ、其の多くは、龍、天女、花卉などを畫かる。其の由來するところ詳かならざれども、天台觀音別行疏に、四龍の中守天宮殿と云龍あり。蓋し是れによる物ならん。我朝にて足利の時世兆殿司明兆東福寺の殿司となり、其の法堂の天井に蟠龍を畫く。大いさ十餘丈、暈光鱗色、皆生けるがごとし。一夜畫龍風雨に乘じ、殿堂を擘き、飛びて天に升るといひ傳ふ。其の後狩野永徳、豊臣秀吉の命をうけ、畫龍の再修に著手し、半途にして病に罹る。よりにて狩野山樂代りて、頭二丈餘、身長十八丈の蟠龍を畫きたり。時人明兆の筆に譲らずと稱譽せり。徳川時代、寛政年間に至り、淺草觀音堂の再修に當り、狩野洞春、美信、東叡、山法親玉の命によ

大正  
9. 9. 29  
購求



り、其の格天井に、天女奏樂の圖を畫き、今存するものこれなり、

○かき繪小袖

畫きたる小袖を著ること古より行はれたり。元和寛文頃の狂歌集に、白無垢に源氏繪かきたる女中の雨に濡れたるを見てといふ題にて、白むくに墨で源氏をカキクケコ、雨にあたりて身はラリルレロといふあり。其の他小袖繪のこと詳しくは、友禪繪の條を參考すべし。

○掛物繪

何にても畫きたるものを掛物に仕立てたる、これ即ち掛物繪なり。谷文晁いはく、立軸と云ふは、横卷に對して云ふことにて、吾が邦の掛物なり。高江村消夏錄に、宋燕文貴溪山行旅圖、立軸高一尺五寸、濶二尺一寸と云へり。此邦の横物なれども立軸と云へり。又た洞天清祿集に、古畫多直、有長八尺者、横披始於米氏父子、非古也と云ふ。又た消夏錄に、吳仲圭松泉圖立軸、裝作横卷と云へり、直に孫退谷跋中に云ふ、吳仲圭古松泉石小幅長條、倣宣和裝法、

改而爲卷と云へり。横卷と横披とは一物にて、立物を横に卷物にしたるなるべし。卷物は昌黎が畫記、右丞が輞川圖など、皆唐代よりもありと見ゆ。宣和の裝法と云ふは、米氏父子に始まると云ふ。清祿集の説と符合するに似たりと。立原翠軒いはく、かけものを寶繪錄には挂幅とあり。齊東野語には挂軸とあり。珊瑚網に小挂幅あり。畫史に小幀あり。輟耕錄にたてものを値幅とあり。二幅對を雙幅と云ふ。横物を横披と云ふ。寶繪錄には二ふく對を對幅と云ふ。鐵網珊瑚に付たてものを直幅と云ひ、よこものを横幅と云へり。珊瑚網に一幅ものを單條と云ひ、卷物を畫史には横卷と云ふ。寶繪錄には卷冊とありと。

○瓦版畫

瓦版を應用せるは繪のみにかざらざれども、瓦版として最も古しと稱せらるる大坂落城の圖の如きは即ち繪なり、又後陽成天皇の筆蹟と傳説ある寶船の圖の如き、或は瓦版にあらずやおもはるるふしあり。其の多く

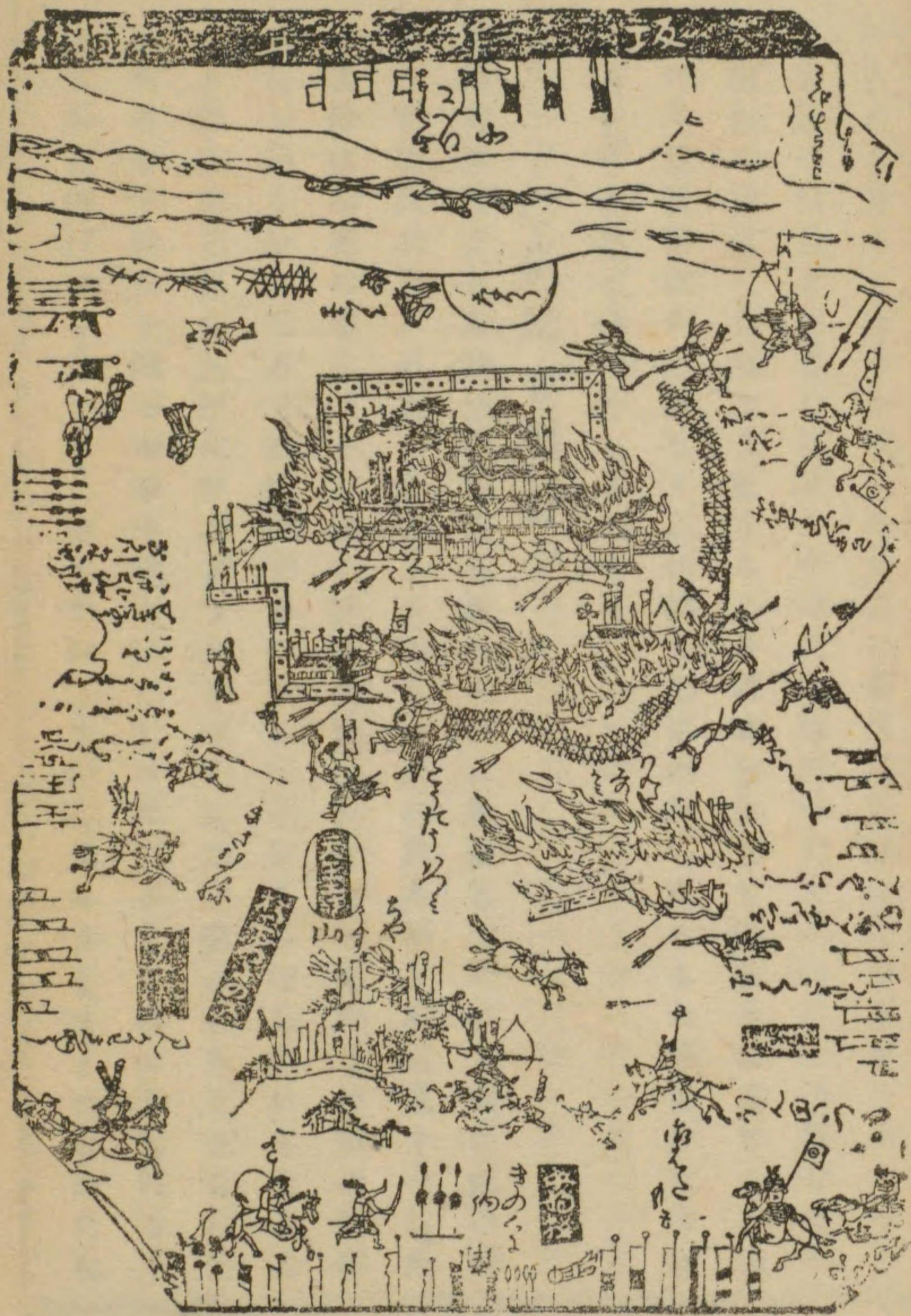


は徳川時代にありて、今の世の如く新聞紙などの無き時にあたりて、最近の事實を知らしむるに、文字繪畫にかぎらず、瓦に彫るゝ。木版よりは容易に、且つ廉價に出來しより、前夜の火災の場所などを瓦版にし、焼場方に頼ちしものなどにも、往々瓦版を應用せるものあり、畢竟するに瓦版は木版などにては時間も經濟も間に合はぬ場合に應用せられしものにて、書畫共に粗雜なるもの多し。

○か はり 繪

飯島虚心氏いはく、替り繪は、紙を折りて、種々の物象を作り、折りかへして繪を變らしむるものなり。彼の三番叟替りて船となる替り繪の如き、最も古きものなるべし。歌川芳藤、善く替り繪を作る。劇場の舞臺を畫きおき、一幕二幕とかはるものなど製出せり。

天童いはく、文化七年、硯亭墨山作、墨亭月磨畫にて、『早替工夫仇討』とい





へる合巻あり。其の草双紙の角書に竹田近江屋積之細工畫とある如く、普通の挿繪を二様に見する仕掛にて、毎葉中央より豎に二つ折となし、他面の繪組に合はず工風なり。一々符號を記して組合せに便ならしめたり。近江屋權九郎版なり。これ即ち世に存在しあるものの中、かはり繪としての最も精巧なるものなり。

○紙繪 附絹繪

黒川眞頼博士、日本繪畫沿革說、日記繪の條に附記していはく、因に此の繪合の卷(源氏物語)に紙繪と云ふことあれば、此に其の事を辨じ置くべし。此の名稱は繪畫の事につきては、主要用の點なればなり、文にこの頃の世には、たゞかくおもしろき紙繪をとゝのふることをあめのしたいとなみあへり(以上文)と見え、又げにいみじうかきつくしたる繪どもあり、さらにえさだめやり給はず、例の四季の繪も、いにしへの上手どものおもしろきこといもを選びつゝ、筆とゞこほらずかきながしたるさま、たとへむかたな



しと見るに、紙繪はかぎりありて、山水のゆたかなる心ばへを、え見せつくさぬものなれば、たゞ筆のかぎり人の心につくりたてられて、今の淺はかなるも、昔の跡に耻なくにぎはしく、あなおもしろと見ゆるすぢはまさりて、多くのあらそひども、今日はかたふくに、興ある事ども多かり(以上文)と見えたり、そも紙繪と云ふは、紙に書きたる繪を云ふ、紙繪の稱は絹繪に對せるなり、絹繪は絹に書きたる繪を云ふ、支那人の紙本、絹本と云ふは、卽是なり、然して文に紙繪はかぎりありて、山水のゆたかなる心ばへを、え見せつくさぬものなればとあるは、平安朝以來繪畫盛に行はれ來しかど、多くは絹に畫がきて紙に畫がくこと少なかりしなり、然して古代の紙繪は、所謂行草畫にして、つくり畫は畫がかざりしなり、つくり畫は、泥繪具を濃く厚く用ゐて、極彩色にせるものなれば、眞の畫なり、眞の畫は多く絹に畫がきたり、是古代の紙繪絹繪の別にてありしなり、然るを花鳥餘情卷十に云はく、むかしはきぬにかきたるを、今の世には紙にかくをかみるとい

ふなり(以上文)とあるは、少し詞足らず、斯くては繪畫は、昔は皆絹にかきたるを、今は紙にも畫がく、それを紙繪と云ふといへるやうに聞ゆ、然れども繪畫は昔とても絹にのみ書きたるものにはあらず、稀には紙に書きたることもあり、斯く云ふ徵は、東大寺正倉院の御物なる樹下美人屏風の繪は紙本なれば也、然れば昔の繪畫は、絹にのみかざれりと云ふは、わろし、源氏物語明星抄に云はく、昔は絹に多分書しなり(以上文)と云へるはよし、又繪合の卷の文に、紙繪はかぎりありて、山水のゆたかなる心ばへを、見せつくさぬものなればと云へるところを、河海抄卷八に云はく、紙繪は紙のたけみじかくて、山水の景ゆたかならざる由歟、懸繪本體歟(以上文)と云へるは甚しき誤解なり、其の故は昔の紙繪は紙を横繼に續ぎて書くものなれば、豎に長さものは十分に書き得られぬ故に、山水などの景色は十分には見せ盡しがたしと心得たるさまなり、是甚しき誤解なり、昔とても紙を豎に用ゐれば、豎長に用ゐらる、又豎長に紙を續げば、幾らも豎に長くなるが故



に、豎に長き山水をかゝむとすれば、紙の使用に従ひていづれにもなるを  
いかに心得て斯くは云はれしならむ、いと／＼おぼつかなし、然れば、紙  
繪の解釋は、河海抄は取るに足らず、花鳥餘情は云ひ足らずと云ふべし、  
因に又云ふ、奈良朝以來より、平安朝初世に至るまでの間の畫は、多く絹に  
書きたる故は、其の畫、佛菩薩の像、及因果應報を示せる圖、其の他種々の曼  
陀羅繪の類にて、十の九は進獻美術畫なれば、極彩色に作りて絹に畫けり、  
是昔の繪は絹本の多かりしこと、そも／＼此の故なり、然りとて、一切紙本  
の無きにはあらず、そは前にも云へる、東大寺正倉院御物の樹下美人屏風  
は紙本なるにても了知すべし、繪合の卷の文に、紙繪はかぎりありて山水  
のゆたかなる心ばへを見せつくさぬものなれば云々とあるは、昔は紙に  
畫がくには、泥繪具を濃く厚くは用ゐずして、所謂行草畫に作るを、ならは  
しとせしかば、斯くは云へるなり、種々の彩色を盡してこそ、山水の幽閑廣  
漠なる景色樹下の鬱々たるさまを、十分には寫し取らるれ、然るを光孝天

皇、宇多天皇の頃より後は、紙繪にも泥繪具を濃く用ゐる巧を盡すやうに  
なりにたれば、昔風の紙繪の畫きやうは際限ありて、行草の畫きやうなれ  
ば、山高水長き景色を見せつくすこと能はず、近世は紙繪の際限を越えて  
泥繪具を以て作りたつる故に、今の世の人の技は、古人よりは淺はかなる  
にもせよ、古人の紙繪には耻づることなく、賑やかに見えておもしろしと  
云へるなり。

因に又た云ふ、本居宣長翁の著はせる玉の小櫛卷七、繪合の卷の條に云は  
く、かみ繪、障子屏風などの繪に對して、たゞ書たるを紙繪とはいへるなり、  
花鳥の説いか(以上文)又云はく、かみゑはかぎりありて、諸抄かみ繪とい  
ふを、絹に對へていふと心得られたる故に、ことわり穩ならず、絹ははたば  
り廣しといへども、紙といくばくのけぢめかあらむ、紙繪のこと上にいへ  
るがごとし、たゞ紙をつぎて書きたる卷物などは、上下のみじかくて、障子  
屏風などの繪のごとくに、廣くゆたかには書きがたきよしなり(以上文)と



見えて、諸抄を難せられたるは、然る事のやうなれど、紙繪は障子屏風の繪に對して、たゞ書きたる繪を云ふと云へるはわろし、たゞ書きたる繪とは次の解にて見れば、紙をつぎて書きたる卷物などを云へるやうにて、いとも明瞭ならず、紙繪とは紙に書きたる繪を云ふ詞にして、別の子細あることなし、たゞ昔の紙繪は、行草繪を書くを常とせるのみ、後生此に注意すべし、然るを障子屏風などの繪に對して云ふとあるはいかなることぞ、障子屏風の繪にても紙に書きたるは紙繪なるをや。

○唐繪

黒川眞頼博士いはく、嵯峨天皇は幼くして聰敏にましく、長じたまふまに博く支那の書籍を覽たまひ、善く文を屬し、書迹亦非凡にせまり、故に風儀も亦漢風を好みたまふ、故に此の御代より天下一般に漢風行はれて固有の風儀は大に廢たる、弘仁年間天皇命じて紫宸殿の障子に支那の賢聖の像を畫がかしむ、賢聖とは聖人賢人と云はれて世間の鑑ともなるべ

き人の像を畫がしめ、朝夕に之を見て以て心の誠とせむがためなり、斯く云ふ徵は、帝王編年記卷十二に云はく、弘仁九年四月庚辰、是日有制、改殿門號、題額、凡大内賢聖並昆明池、荒海障子等、弘仁年中被施畫圖(以上文)と見えたるにて知るべし、又此の文に據りて、天皇の漢風を好みたまひし一斑を見るべし、文に賢聖とあるは、紫宸殿の賢聖障子のことなり、昆明池荒海障子とあるは、清凉殿の昆明池の障子荒海障子のことなり、但此の畫工の名は傳はらず。

因に云ふ、清凉殿は嵯峨天皇の弘仁の初年に、始めて造り出られたるべし、斯く云ふ徵は、類聚國史遊宴部に云はく、弘仁四年九月癸酉、宴皇太弟於清凉殿、具物用漢法(以上文)とあるに據りて云ふなり、是より先、桓武天皇の御時には、未清凉殿の事見えず、是も亦參考に供すべし、此に昆明池荒海障子とあるは、此の時に始めて造り立てられたるならむ。嵯峨天皇の御時に至りては、此のごとく大内の障子に繪畫を施すこと起



れり。

屏風に繪畫を施すことは、奈良朝の頃より其の證見えたれど、禁中の御障子に繪畫を施すことは、此の時や始ならむ。

昆明池の圖は、唐人の圖に據られたるなるべし、荒海の圖は、手長足長の圖なれば、山海經の圖に據られたるべし、賢聖の圖は、古き聖賢圖に據られたるべし、以て天皇の漢風を好みたまひしを見るべし、當時是等の繪を唐繪と云ひて、以て日本繪に別つ、唐繪とは我が邦の圖にあらざる稱にて、後世に流派を以て云ふ所の唐繪日本繪とは別なり、心得おくべし。

嵯峨天皇より以來、漸次に繪畫の行はれ來りて、佛像を畫かくほかに、さまざまの圖を作り出づることゝなり來にたるが中に、己が歸依する貴僧高僧の像を畫がきて、壁にかくる事の行はれ來しは、佛菩薩の像を壁に懸けて拜するより一轉せるものにて、當時最澄空海などの像を多く作りしは此の意なり、又宮殿などのさまを畫かくに、屋根を畫かくすして、たゞ柱と

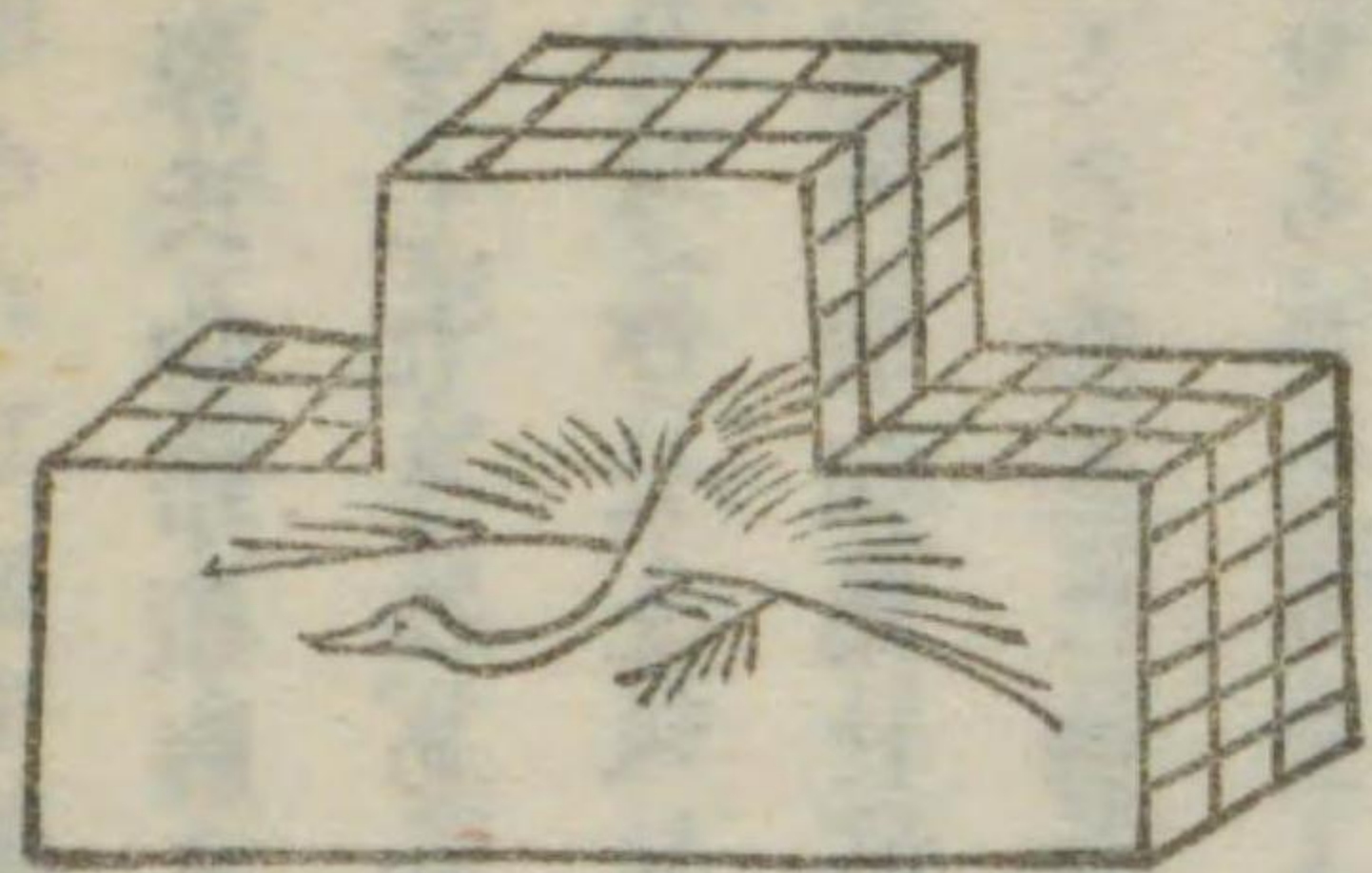
桁とのみを畫かくは、曼茶羅を畫かく方法より一轉して、宮殿の内部を顯露に見せしめむが爲なり。

因に云ふ、賤しき者の屋をばさやうには畫かくす、是もまた心得おくべし。

極樂淨土の圖、六道の圖、佛菩薩圍繞列立の圖などは、多く曼茶羅畫にて、普通の畫にはあらず、曼茶羅畫はすべて、上下遠近等の規矩には合はざれども、一目して見るには便なるものなり。

### ○看板畫

元祿三年版の人倫訓蒙圖彙に、おしろいの看板に上圖の如き白鷺を畫きたるあり、これ白きをおもはしむる判じ物なるべし、看板繪として他にもありや、又其の以前のものありや未だ考へず、鳥居清信の芝居の看板を畫きしはこれより後なり、(芝居の看板繪は後に出だせり)









んばあるべからず、因りて此の戲畫のかたはらに詞書をそへて形と聲と兼備せしむ、もし是れを奇妙とする人あらば、戲畫の功名といふべし、東都山東菴京傳

本書こんにやく形小本一冊紙數三十丁、圖數五十八、其の一二を右に抄出せり。かゝる類の畫は、ひとり京傳のみにあらず、他に往々見るところの一の滑稽圖なるが、京傳の奇妙圖彙によりて、暫く奇妙圖と稱するも可ならんか。

○曲畫

曲畫は、普通毛筆、刷毛等にて畫くべきを、他のあらぬ器物にて畫くをいふ。浮世繪類考葛飾北齋傳に、爲一翁は曲畫を善くす、升玉子、德利宮すべて器械に墨をつけて畫がく、左筆も妙なり、上へ書き上ぐる逆畫をかけり、中にも爪にて墨をすくひかく畫は勝れて妙なり、爪にて畫くは所謂指頭畫なり、本編別に指頭畫の條目を設けたり、筆にて畫きたるが如しとあり、葛飾

北齋傳にいはく、徳川將軍家齊公(徳川十一代)北齋の妙技を聞き、放鷹の途次、寫山樓文晁および葛飾北齋を淺草傳法院に召して、席上畫を畫かしむ。文晁先づ畫く、次ぎに北齋、將軍の前に出で、從容として、おそるる色なく、筆を揮つて先づ花鳥山水を畫く、左右感嘆せざるものなし、後に長くつぎたる唐紙を横にし、刷毛をもて長く藍を引き、さて携へたる鶏を籠中より出だし、さらに捕へて、趾に朱肉をつけ、これを紙上に放ち、趾痕を印殘せしめ、是はこれ立田川の風景なりとて、拜一拜して退きたり、人皆其の奇巧に驚く云々

嘉永六年、柳橋河内屋に催せる書畫會の席上にて、歌川國芳酒興に乗じて俗衣を脱ぎ繪の具にひたして、疊三十疊敷ほどの紙に、水滸傳中の九紋龍史進を畫きしなど、これ又一種の曲畫といふべし。又た文化年間に三輪といへる人は紙をまろめて猿を畫くに妙なりしといふ。

○雲母繪



東洲齋寫樂の畫ける、俳優似顔の錦繪に、雲母を摺り込みたるもの多し、俗にこれを雲母繪といふ。其の他北齋歌麿榮之英山などの錦繪にも往々雲母繪を見るところなれども、寫樂を以て雲母繪の鼻祖といふ説多し。寫樂は俗稱齋藤十郎兵衛阿州侯の能役者なり、俳優の似顔を畫かんとて、顔の皺頰のほくろまでも細に畫き、却つてあらぬさまに見え、五代目白猿幸四郎半四郎富士郎慶治助五郎仲藏等の半身の像を畫きたるあれども、長く世に行はれず、僅一兩年にして筆を絶てりといふ。

○切組燈籠畫

武江年表寛政年間記事の條に、兒輩の玩ぶ切組燈籠繪は上方下りの物なり、夫故始は京の生洲大坂の天滿祭の圖様を重板せり、寛政享和の頃、蕙齋政美多く畫き、又北齋も續いて畫けり、文化にいたり歌川國長豊久、此の技に工風をこらし數多く畫き出だせり、其の梓今にありて年々摺出だせりといへり。







○金碧山水

嬉遊笑覽にいはいく、今金箔を洲濱形のやうに押ことは、もと金箔のもみ砂子を雲のやうに蒔たりしを、それにては箔を用ること多ければ、費を省き箔を砂子にせず其まゝに押たる物ならん、色紙短冊などの泥をを下繪といふ。竹齋物語に連歌のざしきと打みえて云々、下るの懐紙折かさねとあり、金砂子の雲も古畫にはなし、古畫にあるは霞にや(今俗に霞といふ形なり、山などには雲ともいふべけれど其外はかすみで見えたる體にかくもの故、これかすみなるべし)横に長く引て藍の具に塗たり、おもふに地を泥引にし金砂子を蒔くことは、漆器の金蒔繪の法に倣ひしにや、こは足利將軍の頃より始めり、今は彼洲濱のやうなる形を雲とおぼえて是を源氏雲といふはいとをかし、そは源氏物語をかける畫にのみある物とするか、温故集に屋根なきは源氏の繪うつら籠(古青蛾)といへるは、古畫に家の内を見せたるは屋根も天井もかゝず、鶉籠は上に綱を張たる物なれば見立て



ていへるなり、さはれその屋根かゝぬことも源氏繪のみにはあらず、云々。寶繪錄にいはいく、畫山水、用金碧、始于李思訓、穠豔中、出瀟灑清遠、非大手筆不能也、とあり、近世谷文晁、中林竹洞等善く金碧を用ひて、山水を畫き、世にこれを金碧山水と稱す。

○口繪

山東京山の蜘蛛の糸卷に、文化の中比(天童いはいく、文化三年稿、文化四年發行)にや、京傳、『お六櫛木曾の仇討』を作られし時、畫師豊國思ひつきにて、卷中の人物を初めて役者の似顔になせり、又口繪といふもの(雙紙の始めに、卷中の人物を出だし讚などあり)つかひ、はじめに加ふ、とあり。又飯島虚心氏いはく、發句集の口繪は、天明二年板、歳の旦と題せる句集の卷首に、鳥山石燕がゑかきたる、蛭子の口畫ありき、されば發句集の口畫は古くして、繪雙紙の口畫は後なりと。

天童按ずるに、青本にての口繪の始まりは、『お六櫛木曾の仇討』なるべし、されど讀本にては其の以前に數多ありて數ふるに暇あらず、又た口繪に關係なき事なれども、お六櫛木曾の仇討の卷中人物を役者の似顔に畫けるとは虚構なり。又飯島氏のいはゆる歳の旦と題せる句集とは、其の當時月並の句集の歳旦に出だせるものには卷首にいづれも歳旦と題せる例なり。

○黒繪

飯島虚心氏いはいく、黒繪は墨にて黒く畫きたるものなればいふ。天平の黒繪と稱し、天平年間行はれたるものか、奈良正倉院の御物の中、檀弓の腹に、百餘の人物を黒繪にかきてあ





り、當時の風俗および伎樂のさまを窺ひ見るに足るものなり云々、

○畫官

狩野永納撰の本朝畫史には、令云、中務省、畫工司正一人、掌繪事彩色、義解云、畫之雜之類、其朱黛等、雜色在大藏省及內藏寮、隨其用度、臨時受用、常不在此司貯之也、判司事、餘正判事、準之、佑一人、令史一人、畫師四人、畫部十六人、使部十六人、直丁一人、又藤左丞相實熙、號洞院、拾芥抄曰、畫所有別當、今按、中世有畫所頭、準古別當者乎、五位藏人預黑畫等、有熟食、本是內匠寮雜掌也、分內豎、按、中世職員不立畫工司、蓋以內匠寮兼畫所職也、凡內匠寮所統、廣故源亞相親房、號北畠、職原鈔曰、內匠寮掌工匠事、但近代木工修理、知其事、頗似無其實、と。

○畫贊

文晁畫談には、唐繪の贊に和歌を書きたること、古へより有しと見ゆ、草根集のうちに

權律師心敬から繪のものの贊を歌に書てとありしに、たび／＼ある人よりさるよし申たるを、或人のわざとのぞむよし申されしに、水のうへに梅花さきかゝりたるを眺むる人あり、西湖梅とか人の申侍るを

夕霞にしに匂ふも梅が香の紅そふる花のさゝなみ

又中林竹洞の畫論中に、畫贊心得べき事と題していはく、いみじき上手の畫といへども、贊によりて價を減ずる事あり、されば畫贊はみだりに書く物には非ざるにや、まことに詩文などつたなき手してかきたるは、斷ち去らまほしき物なり、中にも心なき者は、今の世に俳諧師とか云ふ者あり、畫位をそこなふ事をもかへりみず、筆さしぬらして、ひた／＼とゆがみざまにぞかきちらしたる、まことに人がらの程も見えて、心ぐるしかるべきを、はちとも思はずなほ所得かほなり、中にも甚しきは畫の上までもかきちらし、氣象よしと思ひたるさまあさまし、價を減ずるのみならず、物をけが



せる事蒼蠅とひとしく惡むべし、六六菴とかいへる者の、英一蝶が畫太郎菴が畫などに、發句とかいふことかきしを見侍りしに、畫の上までぞかきちらしたる、心なき事なり、かやうなるを見るに付いて思ひいづる事あり、昔尾張の國に也有といふいみじき人あり、畫の贊を人のこひけるに、只はじにちさく一行にぞかゝれたりける、こひける人本意なく思ひてなどか中にはかき給はざる、後々はぶれもし心なき者は斷ち切りも致すべし、と申し、かば、餘りに畫の見事に見えてさむらへば、後々はかやうのつたなき贊なくもがなと思はむ人の、斷ち去るに便よき爲に、かやうには書きたるぞ、と申されたりけるとかや、まことにゆうになさけのある人と覺えしなり、さいへばとて、贊は皆はじにちさくかき給へといふにはあらず、今の心なく畫位をそこなふ者にくらぶれば、ゆうに物知れる人かなと覺ゆるなり、よき手にて、程よくいみじき詩文和歌など、けさやかに書きたるは見るも面白く、畫位も一きはそはりぬべし、己が手に書きたる畫には、詩にも

まれ俳諧にもまれ、いかにもかけかし、只名畫古畫などに贊する事は心すべき事なり、云々

### ○五 彩

黒川眞頼博士いはく、日本書紀等の古書に、五彩と記したるは、今云ふ染料と畫具とを合せて云へるなり、繪畫の盛なるに及びて畫の具を使用すること甚だ多し、

推古天皇の十八年に至りて、高麗の僧曇徴と云ふ者あり、此の僧は高麗國王の上れる僧なるが、彩色の製造法に精しくして、種々の畫の具を製出せり、畫の具染料は本邦固有の物もあれども、金銀泥金・銀箔・燕脂・蘇芳・群青等は皆支那朝鮮より仰ぎ、丹朱・藍・紺・青・綠・青・茜・白土等は元より本邦にもあれども、其の製法良からざりければ、これも亦支那朝鮮より仰ぎたりしに、曇徴が製法を傳へてより以來、畫の具類は専ら彼に仰がずしても事の足ることゝなれり、是も亦繪畫進歩の狀況を見るべき一なり、然して又た此の



曇徴は畫の具の製法を傳へしのみならず、紙の製法、墨の製法をも傳へたり、斯く云ふ徴は、日本書紀卷二十二推古天皇十八年三月の條に云はく、高麗王貢上僧曇徴法定、曇徴知五經、且能作彩色及紙墨(以上文)と見えたるに據りて云ふなり、然して此の二人の僧は法隆寺に住せり、斯く云ふ徴は、平氏太子傳に云はく、推古天皇十八年庚午春三月、高麗僧曇徴法定二口來、太子引入斑鳩宮、問之以昔身微言、二僧百拜啓太子曰、我等學道年久、未知天眼、今想殿下之言、昔爲殿下弟子、而遊衡山者也、太子命曰、法師等遲來、宜住吾寺、即置法隆寺(以上文)と見えたるに、因て按ずるに、曇徴が五彩を製せしも、法隆寺に在りて製せしものなることを知られたり、曇徴は高麗の畫の具の製法を傳へし者なれば、繪畫をも能くせし者なることは推知せらる、是によりて心得べき事あり、其は何ぞといふに、方今現存せる法隆寺金堂の壁畫を曇徴が畫がけりといふ傳説なり、是は決して曇徴にはあらざるなり、其の故は、今の法隆寺は元明天皇の和銅元年に天皇の詔に依りて更に作りたる者なればなり、云々

○胡粉畫

飯島虛心氏いはく、胡粉繪は、甚古し、聖武天皇の時、既にこれあり、現に奈良の諸寺に存せる其の頃の古器物中に、往々胡粉をもて畫きたるものあり、後世紙上に濃く胡粉を引き、其の上に畫きたるあり、これをも胡粉畫といふ、寛永頃の草紙にこれあり(天童)いはく、寛永頃の胡粉繪の草双とは、奈良繪をいふにや、文化文政頃、芝神明前にて胡粉畫を鬻く者ありしが、其の畫は遠景山水にして、畫法一に西洋畫に據る、これ司馬江漢の遺法なりとぞ。

○米粒畫

嬉遊笑覽にいはいはく、今米粒に法華の題目佛名または著色にて夷大黑唐人行列の圖などを書くものあり、江南錄に史應用善寫細字微如毛髮常於一錢內寫佛家心經及於麻紙上寫一經書又於一粒麻上書國泰民安四字人欲



讀之須澄目良久乃辨凡書時於闇室中向陽獨開一竅如錢大因映其明方能寫之咸平五年爲吉州永新令後以貪慾受賂敗謝肇制もこのことをいひて此雖絶世之技然亦近於棘猴矣以余所見有便面上書西廂雜劇一部者余亦能之但目力勝人耳不關書法也といへり虫めがねを用ひてかゝば何の難きことあらん澤元愷が瓊浦偶筆近世施生兩者能於方寸之猪作小楷數千點畫不淆於麻上宛轉書之成五言詩一絶人甚奇之是未知有術也これは篤廊偶筆の文なり其文には昔王夢澤稱施主南於方寸之楮云々といへり近ごろ西洋の銅版の法に倣ひて微細なる顯微鏡を用ひざれば見えがたき書畫を鏤刻す精巧をさく彼に劣らず麻粒の細字奇とするにたらず葛飾北齋傳にいはいく北齋大圖に巧なるのみならず又細小の圖を畫くに妙なりかの回向院にて布袋の大圖を畫きし時跡にて米一粒へ雀二羽を畫く人みな肉眼をもてこれを見るに苦しむ云々

異日本繪類考卷一一終

異日本繪類考卷三

漆山天童著

○彩色摺繪

彩色摺は古來明和四年に北尾雪坑齋の畫ける『彩色畫選』を以て其の嚆矢と記せるものも將たかくおもへる人もあるが如し『浮世繪』といへる雜誌第十五號に彩色繪本目錄と題して明和四年の『彩色畫選』を筆頭に順次享和二年に至るまで四十七部の書目を載せあれば余は明和四年以前に溯りて見聞せるものを少しく列記すべし。

塵劫記 いふまでもなく吉田光由の著寛永四年の版本に彩色ありといふ

余も又此の前後のものにて『宣明曆』に色摺あるを見たり。

父の恩 英一蜂小川破笠共畫 享保十五年刊



女教文章鑑 西川祐信畫

寛保二年刊

●本書蓋し彩色摺のもの、は後摺のものか疑を存す

明朝紫硯 大岡春卜摹 延享三年刊

本書芥子園畫傳に倣へるもの如し

鏡中圖 櫻寧齋溫然畫 寛延三年刊

本書鞘繪の錦繪を一帖に仕立てたるものなり

繪本海之幸 勝間龍水畫 寶曆十二年刊

(繪本)山之幸 勝間龍水畫 明和二年刊

繪本金平武者 勝川春水畫 明和四年正月刊

彩色畫選 北尾雪坑齋畫 同年九月刊

右の如く余の見たる所に依れば、彩色畫選は明和四年九月刊なるに、其の年正月に既に繪本金平武者なるものあり。古來世人の此の書を云爲せざるも亦一奇といふべし。

飯島虚心氏彩色摺繪に就きては詳しく記述せり。行文少しく長けれとも、左に其の全文を載せん

馬鹿語(明和頃の板本)に、近く色摺りのはじまりを考ふるに、古よりある所の龜相なる白粉箱の上包、または繪雙紙の袋などに、少しく模様ありて、それを藍と紅とにて彩色し、板木にせしは、見あたらざりしに、享保の末、栢筵の父、才牛の遠忌追善の集『父の恩』に、即ち才牛か句三句の畫、勝間龍水筆(天童いはく、前に記せる如く父の恩の畫者は、英一峰と小川破笠なるに、如何にして、勝間龍水とせしか疑はし)をわづかに色摺になし、其の後元文のはじめ、卯時菴、珪琳の社中より、春興の摺物出でし時、破魔弓の畫を、吉田魚川はじめて青・黄・赤の三遍摺となし、及び打出しのしろきを巧みて、其のころ世に鳴り、今普く俳集摺りもの花とはなれり、それをかりて近き頃もてはやせし略曆の色すり、又それを本として、錦繪とはなりたり。これより古の鳥居・奥村等が膠畫・馬糞箔など用ゐしさびしき色は、月の前の螢の如



く影うすくなりなき、浮世繪類考別本(鈴木白藤書入)に、彩色摺の始めは紅畫なり、四五遍摺の彩色は、延享元年奥村文角か畫などに見ゆ云々。按に(飯島氏)享保元文の頃より、既に色摺りを工夫して摺りたるなり。されど精巧ならず。明和の始より漸次精巧になりて、終に東錦繪の稱おこるに至れるなり。今日に至りては、其の摺法極めて多し。繪畫叢誌に、摺法の大要を擧ぐ。云く、摺法は、凡そ八種、即ち墨摺、彩摺、渲摺、光摺、肉摺、糊摺、箔摺、布目摺等なり。

墨摺 墨すりの中にも、種々あれど、要するに始めに摺るは、條線に屬する骨法、又は淡墨等をすり、然して濃墨を加へ、いよゝゝ濃からんを欲すれば、愈摺をまして、墨を重ねるなり。

彩摺 彩摺に於けるも亦然り、彩色の數多きときは、工を用ひることも亦多し。加ふるに濃淡の同じからざるあるを以て、工を重ねること二十回以上に及ぶものなり。

渲摺 渲摺は、天水の暈光、藹然として有るか、無きかの様を見するため、或は朝陽の紅光、遠きに隨て減ずる處、染分の衣袖、明暗の界を知らしめざるが如き類は、此の法により、これを摺るなり。其の法既に色料を抹せし板上、幾部分をぼかし、さうきんを以て軽く拭ひ、しかして紙をあて強く摺り、渲暈の厚薄を分たんが爲、四五回もこれを摺るなり。其の工人研究の功を積み、手術練磨せるものにあらざれば、艷彩を發せしむること能はず。其の妙を極むるに至りては、筆にて染むるとも及ぶべからざるの趣味あり。

光摺 光摺は、墨又は彩色の光澤を發せんが爲、施すものにして、乾板に就き彩摺の繪紙をあて、緊く刮りて、墨色は漆のごとく、金光は電のごとくならしめ、或は白地に浮花隱紋を生し、圖中に凸凹をあらはす、皆此の法の專にする所なり。既になれるものに後工を加ふが故に、一名を上面摺といふ。



肉摺<sup>○</sup> 肉摺は、人物の肌膚肉骨の凸起など顯はさんが爲に、既成の繪紙の裏面に就き、工人肘頭の骨もて緊く壓し、膚肉の狀をして眞に逼らしむるの法なり。此の法、往時は行はれたれども、近年はこれを見ず、其の法廢れたるにや。これを一に隱起といふ。

糊摺<sup>○</sup> 糊すりは、米糊を少しく彩具中に加へ、米の澤によりて、彩色を艶發せんが爲に用ひるなり。

箔摺<sup>○</sup> 箔摺は、摺板と稱する換板にて摺りなし、星月のひかり、劍華、刀色等より、衣紋、髭畫の狀に至るまで、都て金銀の光色を上面摺となす故、又これを研ぎ出しといふ。或は金銀粉を糝抹し、雲母粉を點襯するの類は此の部内に屬し、妨なからん。

布目摺<sup>○</sup> 布目摺は一名をしやすり又ちりめんすりといひ、虚摺ともいふ。紗羅布帛、縞紗の片を木版に貼り、繪紙を其の上にあて、強くこれを摺れば、腕子の素地、隱々として紙上に痕をとめ、甚うるはし、これ實物を

もて彫刻に代用せしむるものにて、茲に至り摺法の妙は、筆にてなし得ざる所をなせるものといふべし。

### ○細密畫

飯島虚心氏いはく、浮世繪類考、橘守國の條に、姓は橘、繪村氏、名は有税、宗兵衛と稱し、後素軒と號す。浪花の産なり云々。刻板の密畫に妙を得たり。精密奇巧、此の人より起る云々。享保時代、刻板の密畫、唐土訓蒙圖彙に始れるなるべし。夫より以前かゝる細密の板本を見ることなし。某氏筆記に、葛飾北齋回向院にて、布袋の大畫をかきしあとにて、米一粒へ雀二羽を畫く。人みな肉眼をもて、これを見るに苦しむ云々。下略

按ずるに、古來細密畫を善くせしものありしならん。古寺所藏の佛畫等には、往々細密にして、肉眼をもて視る能ざるものあり。彫工勝友、嘗て葛飾北齋翁の彫刻下畫、一百三十有葉を藏せしが、其の大きさ方四分五分、或は一吋一寸五分、其の圖は、いづれも細密にして、着色極めて精し。人物あり、花卉あり



り、鳥獸あり。中に奥州松島の全景を畫きたる一葉あり。豎一寸五分横二寸五分の中におきて、松島の島を數百を畫き、傍に片假名をもて、島の名をしるし、七十一翁、北齋爲一筆と落款せり。其の極細極小なること、壯年の徒といへども肉眼をもて視る能はざるなり。實に七十一歳の老翁が畫きたるものとはおもはれず。武州秩父の人に、玄黃齋といへる彫刻家あり。視力人に過ぐ。白晝天を仰ぎて、辰星を算ふ。嘗て豎幅一寸五六分の方面に、孔門の弟子三十餘人を彫刻せり。又大黒天の根付を刻み、其の全面に蠟一千を彫刻せり。其の纖細なる固より肉眼をもて見る能はざるなり。此の根付今英國倫敦の博物館にありといふ。この人、生涯眼鏡を用ひず。且身幹長大にして、歳九十餘、よく日に二十五里を行く。人皆仙と稱す。明治十八年、歳九十五六にして死す。印籠譜二卷を著はす。其の彫刻の纖細なる、未だ嘗て見ざる所なり。彼の守國が唐土訓蒙圖彙に比すれば、其の優れること、萬々なるを知るべし。序に、上略、收千里乎盈寸、驅萬象於指下、雖有明眸者、非極視專瞳數

拭數翁蓄而後張、不可得其象焉。洵曠世之絕技、平生所未觀也。又按に、世に密畫細字を善くするもの往々これあり。余が幼時、下谷山下の路上にて米粒へ夷子大黒を畫きて賣りし一老翁ありしが、近頃淺草公園にて、豆粒へ題目念佛、又は神名の文字を書きて賣る者あり。

天童按するに、『印籠譜』は天保十年の刊にして、玄黃齋五十歳頃に成れり。玄黃齋、姓は森氏、竹口貞齋、杉田祐齋、松島英齋等の師なり。印籠譜の跋にいはく、玄黃齋は畫工に非ずして畫法に精し、毎に名人の遺蹟を獲ること、に大なる者は能く之れを小にし、脩き者は能く之れを短くす云々と。以て其の一斑を知るに足る。飯島氏は印籠譜を評して、彼の守國が唐土訓蒙圖彙に比すれば、其の優れること、萬々なるを知るといへり。細密畫として、唐土訓蒙圖彙に勝れるもの枚擧に暇あらず。中にも岡田玉山、岡熊岳等の畫ける『唐土名勝圖會』の細密畫なることは、世既に定論あり。印籠譜の次位に置くべきものか。然るに何が故に唐土名勝圖會を數



へ來らざりしか、いぶかしき限りなり。又米粒、豆粒に畫けるを載せあれども、これ又一種の技術にて細密畫として論じべきものなるやは疑はし、余は前に米粒畫として別に本編第二卷に畧述せり。

### ○象眼畫

天童おもふに、象眼の文字既に奇なり、世人多くは其の奇を奇とせざるが如く。飯島虚心氏も、象眼畫を詳述して、其の文字に言及せず。然るに象眼の文字を奇とおもふは、獨吾のみにはあらず。徂徠も其の著『南留別志』に「うがんは鑲嵌なりといひ、桂川中良また其の著『桂林漫錄』に、象眼は相嵌と書くぞ本字なる可き『稗史類編』に云、予當見夏雕干戈、銅上相嵌、以金、其細如髮、相嵌、今訛爲商嵌、按に、相商の音より象に轉じ、嵌を眼に訛りたるならん、といへり。又今の世の人は多く、雜嵌或は象嵌などといへるか、黒川眞頼氏は象嵌と、稿本日本帝國美術略史には雜嵌とせり。徂徠の鑲嵌といへるは何に基つけるか或は鑲の字義より推考せしか、語簡にして不明なれ

ども、支那にて義齒を鑲牙といへるより考れば、徂徠の説妥當なるが如し。そは兎まれ、象眼の起源は何時なりしか、我國にては聖武天皇の頃に既に盛んに行はれし事は推しはからるれと、確かなる證左なし。飯島虚心氏も起源を記さずして、象眼畫は、鐵板および刀の鏝鐺第一、金銀の薄片を貼付せしめ、花卉山水等を描出せしめたるをいふ。加賀の工人、巧に象眼を作るこれを加賀象眼といふ。又眞鍮をもてせるあり。これを眞鍮象眼といふ。漆器に象眼塗あり。象眼の製に倣ひ作れるなり。工藝志料に、象眼塗は、金銀線をもて鳥獸花章を器物に嵌し、これに黒漆を施し、而して後これを磨出せしものなり。其の始詳ならず。文化年間、尾張名古屋の工人、善く象眼塗りを製す。象眼塗りは文治の頃既にこれあり。近時に至りては、江戸の工人も亦これに倣ふてこれを作る、といへるのみ。

天童按するに、象眼畫は、古書に浮線綾ふせんりょうの裳も唐衣からきぬざうざうががんが羅らなど、或は紫の浮線綾に青きざうががんがをつけて、伊勢の海といふ、催馬樂を葦手に縫



ひたりなど、あるを見れば、決して鐵板及び刀の鏝鑄等にのみ施せるをいふにあらず。又鏝の象眼は埋忠を祖とす可きか、併して天平寶字頃の木畫なども是れ又象眼の一種といふべし(木畫は後卷に記載せり)

○さしこ半纏畫

飯島虛心氏いはく、刺子半纏繪は、即ち刺子半纏の模様畫なり。刺子半纏は、消火夫、又は木工泥工など、失火非常の際に用ひる半纏にして、其の模様頗る精巧なる物あり。歌川家の畫工、國磨、最も此の模様に長せり。

按るに、房總、海岸の漁夫、著する所の上衣に、日の出に鶴、又は萬歲、武者などの模様を染め出だし、大なる定紋をつけたるあり。これ亦た一種の模様にして、刺子半纏の繪と、略同じ。(これ大漁のありし時、賀の記念として、つくるところのものなり)

○さとり繪

山崎美成『麓の花』に遠碧軒記を引きていはく、安土の惣見寺の繪馬に男

子が棒をつきて、篋を傍に捨ておき、箕を片手に持ち、傍に蚊帳をつりたる體、狩野永徳が畫なり。これは信長公御好にて、氣を直にへらをしてかせければ、身を持と云ふをさとり繪に被仰付、珍敷圖なり。こゝにさとり繪といへる名の見ゆるはおもしろし。今も世にもてはやす鎌輪ぬといへるものも、明曆の頃、もはら遊びしものなり。是れさとり繪といひてよし。因みにいふ。こはそれとはかはりたることなれど、今もわらべの戯れ咄に無筆の狀やるとて、畫かきてことをもらせしなどいへることも、いとふるく見ゆ。醒睡笑卷の上に曰はく、文盲なる人、ゆがけをかりにやるとて、紙をひろげ手のひらに墨をつけ、ひたとおし、うでくびのかたに、ほそきすぢをまはし書きて、是をおかしあれといふてもたせつかはしたり。みるにうなづき、ゆがけをかせといふことの返事をせんと云ふまゝ、皿と椀のなかを書きて、もどしけり。かりにやりたる人、合點し、さらはると云ふ事か、是非におよばぬといへる見ゆ。また曾呂理狂歌咄卷の一にいはいはく、唐はしのあた

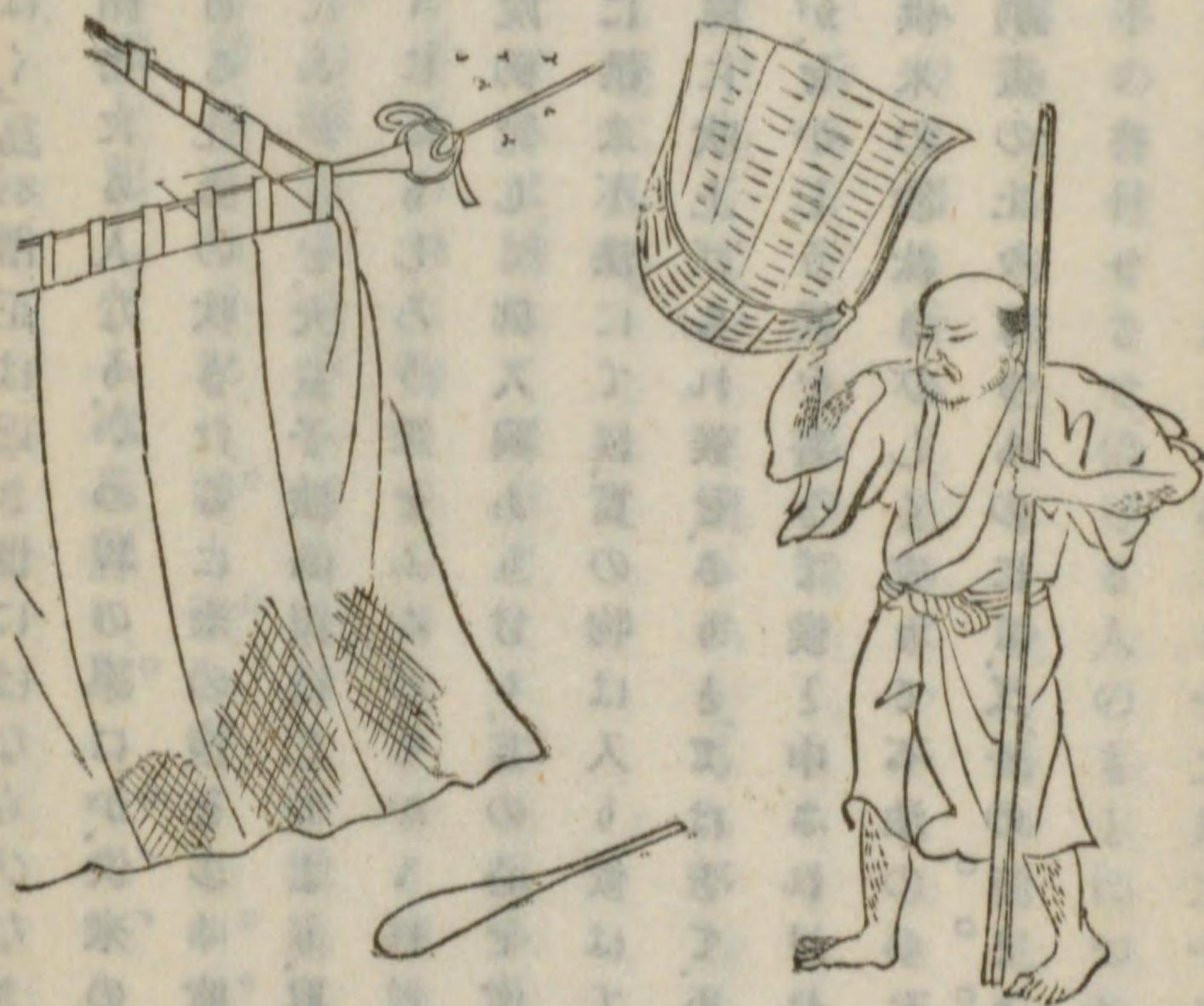


りに酒うる翁有り、本より無筆にて帳に畫をかきて覺とし、十二月二十日ばかりに、物書く人をたのみて、酒手の書付せさせ、借ける人のもとにつかはして、代をば取ることなり。畫の書きたる有様、色々なる中に、馬の前足の間へ、人のかしらをさし入れて、噛みつき居る所あり。是れはいかることぞと問へば、馬をくらふ所は馬九郎と云ふことなり。馬の股をくらふところは、又九郎といふ心なりといふに、をかしくて、かくぞ讀みける、馬九郎と又九郎とを一つ畫にかくはまことに覺二九郎。

古畫備考にいはいはく、此のさとり繪といふは、繪にて詞の意をさとり解かしめんと、の義なり。興あることにこそ、後世の判じ物といふ者は、さとり繪の唱の鄙びたる者なり。その判じ物の古雅なるは、今も越前の判じ物圍扇なるべし。又文字を加へて書けるは、古印本の狂言記に、鎌と輪を畫きてぬ、文字を副へて、かまはぬと讀ませ、酒合戦を記したる水鳥記に、鑿にて、文字をそへて、飲手と讀ませたるなどなり。

天童按ずるに、古今著聞集にいはいはく、鳥羽僧正は近き世にはならびなき繪かきなり。法勝寺金堂の扉の繪書たる人なり。いつ程の事にか、供米の不法の事有ける時、繪にかゝれける辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹き上げたるか、塵灰の如くに空にあがるを、大童子法師原はしりより、取りとゞめんとしたるをさま／＼におもしろう筆をふるひてかゝれけるを誰かしたりけん、其の繪を院御覽して御入興ありけり。其の心を僧正に御たづね有りければ、餘りに供米不法にて候、實の物は入り候はて糟糠のみ入れて軽く候故に辻風に吹上げられ候を、さりとはとて、小法師原が取りとゞめんとし候が、をかしう候を書きて候と申されければ、比興の事なりとて、夫れより供米の沙汰きびしく成りて不法の事なかりけり云々、此等是一種の諷刺畫の上々なるものにて、又一のさとり繪といふも可なるべし。





○左筆

錦所談にいはいく繪尻鞘或は馬具筆に左筆と稱する物は右筆に對したる稱なるべし。管見記御禊行幸服飾部類繪尻鞘の劔の注に云鰐文地虎文。色取其上書鰐文也。右は左筆是ハ地ノ虎文許也。是ヲ左筆ト稱ス。按するに鰐文の方は其の形を巧みに畫がけり。又左筆の方は唯虎の斑を蜥蜴の如く畫がき其巧みなきを以て右筆に對し左筆と稱するなるべしと。

こゝに云ふ左筆はこれとは異なれり。所謂左の手にて畫ける繪をいふなり。ひとり繪にのみ限らざれど天性の然らしむるところか。或は中年にして右手を失し左手を用ひしものか。日本にて左筆の有名なるは浮世繪師の勝川春好(春章門人)と窪俊滿の二人なり。春好の畫けるもの(美滿壽組入の如き)に春好左筆と署せる多く。窪俊滿の尙左堂といへるはこれ又左筆なりし爲なり。式亭三馬はいはいく春好五十六歳の比中風を患ひ業を廢し後年麻布の善福寺に遁世して在りしが焉馬翁が需に應じて市川白猿の肖



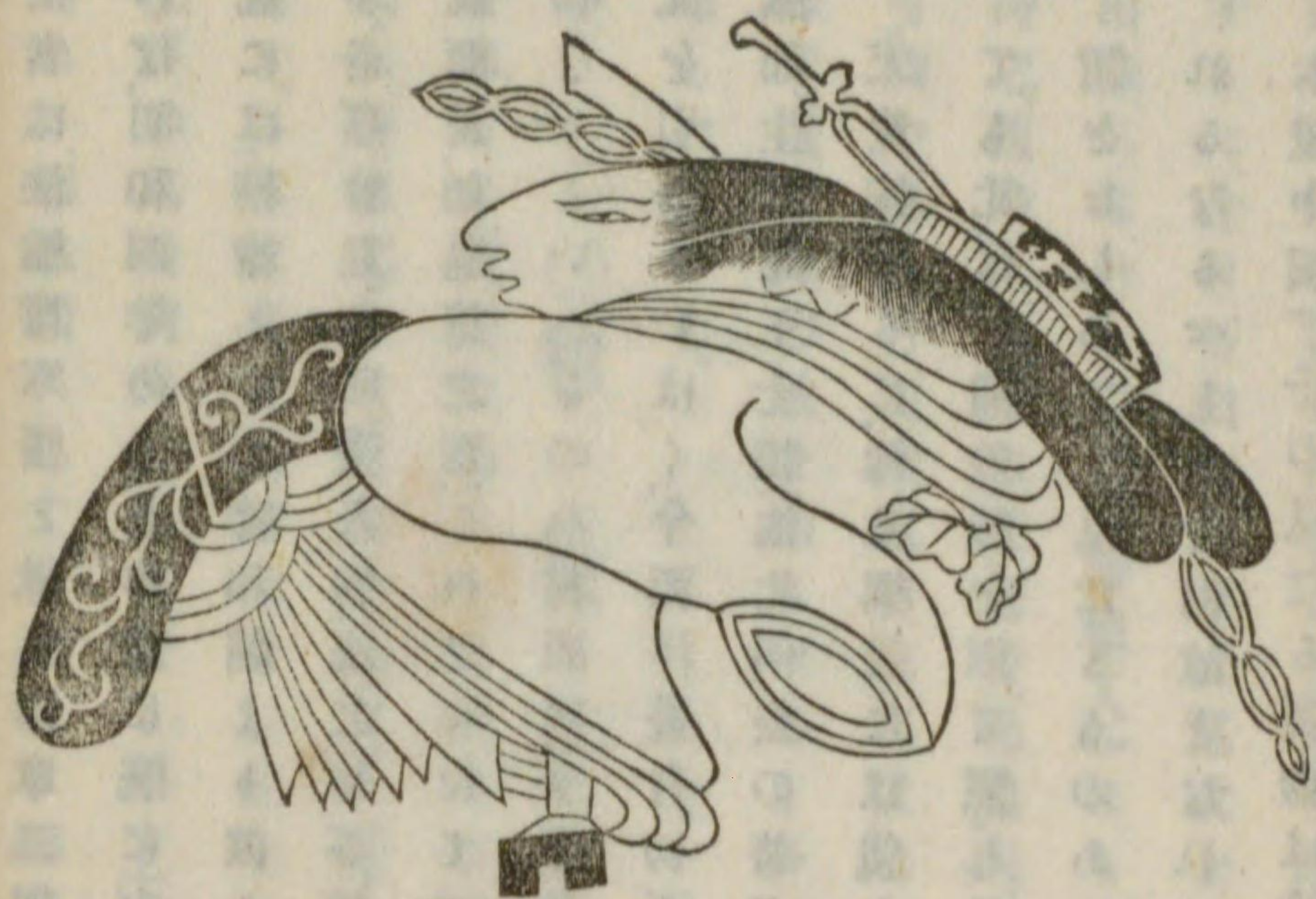
像を左筆に畫きたることあり、此圖『今日哥白猿一首』に見ゆ云々(天童按するに、今日哥白猿一首は寛政十一年の出版にして、其の以前、寛政九年の出版になれる『美滿壽組入』にも春好左筆と署せる圖あり)文晁畫談に魯得之、西冷人、寓秀水、工畫竹、晚患疾、以左手寫竹、風韻尤佳、陳處士莢贈詩、有興可胸中有成竹、左腕風行忘起伏之句、歎曰、子爲我傳神矣と。秀水縣志を讀て錄す、畫徵錄の缺を補ふべしとあり、中途にして左筆となれる、春好と同一轍といふべし。

○鞞 繪

日本にて鞞畫の起りしは何時の頃なりけん、確かなる證徴なし。飯島虛心氏は、寢惚文集の鞞畫を詠すと題せる狂詩を見て、此の文集は明和四の撰なり。されば其の頃流行せしものかといへり。天童按するに、寛延三年の冬江戸の萬屋清兵衛(松葉軒と稱す)の發行に係る『鏡中圖』と題せる繪本一冊あり、彩色摺にして純然たる錦繪六枚を蒐め、一帖となしたるものなり。

畫者は法橋櫻寧齋と歎し、印章二個には藤原溫然とあり。此れ即ち鞞繪なれば、明和四年の十七年前に既に存在せし事を證するに足る。又た嬉遊笑覽には、鞞繪といふ物、和蘭より渡りし物也、池北偶談に西洋所製玻璃等器多奇巧、曾見其所畫人物、視之初不辨頭目手足、以鏡照之、即眉目宛然、姣好、鏡銳而長、如皂筆之形。これこゝにて刀劍の鞞にうつしてみるさや繪といふ物なりといへるのみ。村瀬栲亭亦其の著藝苑日涉に此の池北偶談の右の文を引きていはく、今西洋畫有初不辨何狀、以光鬆刀鞞照之、即人物鳥獸宛然如生者、此王士禎(池北偶談の著者、清人)所謂以鏡照之者也といへり。天童按するに、池北偶談には鏡を以て之を照すとあり、おもふに日本にても元は一種の鏡を以て照し見たるものなるべきに偶然に墨漆の刀鞞をおしあてて見たるものありて、それより鞞畫として流行れるに至れるなるべし。そを何故となれば、新板書籍割印帳に、寛延午年の條に、『繪本鏡中圖』予の見たる實物は繪本の二字無し、折本箱入全一、墨付八折





外に鏡添と記せり。此の鏡添と記せるは其の確證なれど、惜いかな、予の見たる『鏡中圖』には既に遺失せしか鏡の附屬し居らざりし。然るに明話頃に至りては、鏡を附屬せずして發行せしものか、所謂寢惚先生文集に詠鞘繪と題して、七言絶句の狂詩あり。二人頭似鉢瓠瓜、背曲未申著物斜笑、此一枚京土産、皆々映鞘更相誇と猶ほ考ふべし。

武江年表、寛政年間記事中に鞘畫の戯れ行はるとあるを以て見れば、當時、酒席の間など、多人交りの場所にて、鞘畫

をもてあそびて、笑ひさざめきながら戯れ遊べるさま、おしはからる。

○下畫

源氏物語の若菜にいはく、御屏風四帖に内の御てかゝせたまへる、からのあやのうすだんに、した繪のさまなどおろかならんやは、おもしろき春秋のつくりゑなどよりも、この御屏風のすみつきの、かゝやくさまは、めもおよばず、思ひなしさへめでたくなん有りける云々。或抄に、うすだんはうすだみにて、下繪を書きたるなり、その上に宸筆にて頭をかき給へるなるべし。云々

榮花物語、駒くらべ、多寶塔供養の條に、色紙の御經、したゑかゝせたまへりひやうしのゑに、經のうちの心ばへを、みなかゝせたまへり、云々。今の下繪といふは、又下書きともいひ、畫の稿本の事なり、右の源語、榮花等にいへるは、後にて文字を書くべき色紙等に、先に繪を書けるをいふ。

○指頭畫



槃礴勝話にいはく、筆を用ひず戲に指にて畫くを、指頭墨とも、指墨とも、指頭畫とも云ふなり。柳里恭の墨竹又は大雅堂の山水人物、其の外にも多き事なり。畫徵錄にも、高其佩、王德晉の徒、之れを爲す事を載せたり。之れも知らざれば鑒裁に誤ることあるべし。云々。

飯島虚心氏いはく、龜玉は名を安定、字は子保、江戸の人、黒川氏右膳と稱し、指頭畫を善くす。武江年表、寶曆六年六月、黒川龜玉卒、注に五十五歳、男を松蘿といふ、文化十二年板、諸家人名録に、龜玉、名は徳邦、字は子慶、下谷、黒川右膳とあり、これ二世龜玉にして、また指頭畫を善くす。二十餘年前、清人羅雪谷、淺草寺中に假居し、指頭をもてよく蘭竹を畫がく、其の後この枝をなすものあるをきかす。

天童按ずるに、享和二年に佳信なるもの、玉田永教の著せる神道の書「阡陌の立石」といへるものに、指頭にて畫けるあり。又文化八九年の頃、大阪に雪高、雪掉、熙々堂等の、人々ありて、指頭畫を能くし、「五畿内名産圖會」

に畫けるあり。おもふに、其の當時大阪に自書齋といへる指頭畫家ありて、門人も多少あり、右の雪高、雪掉等は、自書齋の門人なるが如し。ひとり雪高は女なり。

藤原貞幹の好古目録に、平畫と題していはく、香祖筆記曰、鈕玉樵、琇云有王秋山者、工爲、學畫、凡人物樓臺山水花木、皆于紙上用指甲及細針、學出設色濃淡、布鏡淺深一法、古名畫按、學當作、平音、築字書、以手學物也。近關中有織畫、乃破紙爲條、織成之、山水人物、花鳥、布置設色、種々臻妙、與刺繡無異、亦奇技也。近年平畫間アリ、俗に指畫ト云。龜玉コレガ祖ヲナスト。

○劇場看板繪

飯島虚心氏いはく、劇場の繪看板は、初代鳥居清信より以來、世々相繼ぎ、これを畫くを例とし、今に至る。鳥居の繪看板にあらざれば、人皆不可として仰ぎ觀ざるなり。其の畫法は、人物を畫くに手足太くして、恰も瓢箪の形の如し。故に世に其の足を指して鳥居の瓢箪足といふ。一説に歌川豊春嘗て



繪看板を畫きしことありしが、畫法は、一に鳥居に據ると。文化四年、葛飾北齋市村座の繪看板を畫きしが、己の畫法なれば、人物瘦せて、甚だ見ぐるしかりき。當時の人、歌舞妓の繪看板は、鳥居に限れりと評しあへり。己も亦自ら悔みたりとぞ。又近世の河鍋曉齋市村座にて、能の土蜘蛛を演せし時、其の繪看板を畫きたり。畫法鳥居に據ると雖も、己に己が意を加へ、恰も看板繪に熟達せるものの如く、頗る巧妙なりき。時人稱して、丹青の奇才なりといふ。

○劇場番附繪

飯島虚心氏いはく、劇場番附の畫は、看板と同じく、鳥居家世々これを畫き他家の人は、嘗て畫かざるなり。天明六年、歌川豊春、桐座の番附を畫き、寛政十年、猿若座の番附を畫きしことありしが、畫風いづれも鳥居風に據りて歌川家の筆とはおもはれず。北尾重政も亦桐座の番附を畫きしことありしが、これ亦鳥居の風に據る。實に番附は、鳥居風にあらざれば行はれぬものなりとぞ。鳥居世々の中、清信、清倍、清満、清長の四人、最も妙を得たり。

天童按するに、飯島氏、劇場番附畫工として鳥居家の四人を擧げしも、其の如何なるものを畫きしかを明記せじ、却つて豊春、重政等を云云せり而も、單に桐座の番附を畫きしとのみ、これ又如何なるものなりしか、世の劇道通に教を乞ひたきものなり。又鳥居清信の番附繪は、理に於いてあるが如く、想像せしにあらぬや、或は狂言本を指せしにあらぬや、左に余の見たる番附繪本を聊か年代順に掲載せん。

○外題	○畫工	○年代	○座名
諸鞆奥州黒	鳥居清満	寶曆二年七月	中村座
皐需曾我橘	同	同四年正月	市村座
百千鳥艶郷曾我	西村重長	同年同月	
江戸容儀曳綱坂	鳥居清經・同清長	安永元年	市村座
綾知矢聲太平記	鳥居清長	安永五年	森田座



瞻雪榮鉢樹 <small>ちとみしゆきさかへはちのき</small>	鳥居清長	安永七年	中村座
伊達錦對將 <small>ついでゆみとり</small>	同	同	森田座
歸花英雄太平記	勝川春好	同	八年
吾孀森榮楠	北尾政演	同	市村座
劇場花万代曾我	勝川春常	同	九年
群高松雪旗 <small>ゆきのしらはた</small>	同	同	同
四天王宿直岩綿 <small>とのみのきせわた</small>	鳥居清長	天明元年	中村座
むかし男雪雛形	勝川春常	同	市村座
五代源氏貢振袖 <small>みつきのふりそで</small>	北尾政美	天明二年	中村座
七種粧曾我	勝川春常	同	同
助六曲輪名取川	勝川春旭	同	同
隅田川柳伊達絹	勝川春常	同	市村座
江戸花三升曾我	北尾政美	同	三年

曾我娘長者	勝川春好	同	四年	同
大商蛭小島 <small>びるがこ</small>	三	蝶	同	同
雲井花芳野壯士	豐	丸	同	同
雪矯竹振袖源氏 <small>ゆきもつたけ</small>	北尾政美	同	五年	同

(此の番附畫は三蝶も畫けり。又此の間富川房信勝川春英も畫きたれど刊年不明なれば載せず)

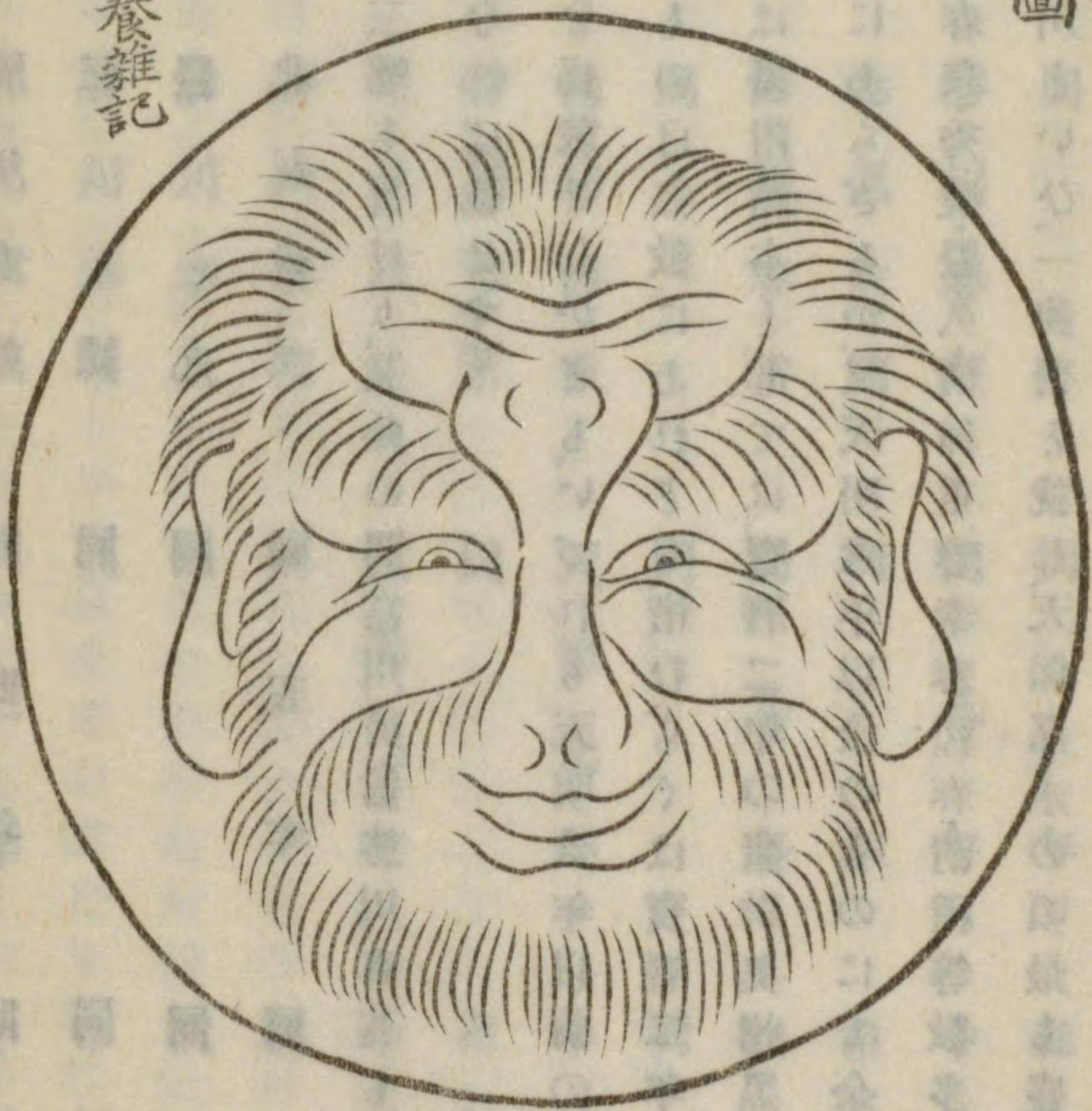
以上僅に二十二部を掲載せしかども、いづれも天明六年以前のものなり。其他畫工不明のものは無數にあれども、惜むらくは寶曆二年以前のものは未だ見ず。或は番附繪本としては、寶曆二年の諸鞞奥州黒を以て嚆矢とすべきものにあらざるか。又天明六年以後のものにて余の見たる限りに於いては、春泉秀蝶・豊久清種・重春素春・種春・清種等數多あり。而して重春は姓を澤川といひ、一興齋と號し、天保嘉永の頃最も盛んに畫き量に於て他に傑出せり。種春は重春の門人にして重春に嗣きて畫き



まんてんのつ  
圓轉圖

開口如咲  
世上看冷  
煖  
閉口似怒  
人面逐高  
低

○山崎北峰の三養雜記  
所載



嘉永以後文久に至るまで盛んに畫けり。

○上<sup>じやう</sup>下<sup>げ</sup>繪<sup>ゑ</sup>

上下繪は、一の人面を畫けるもの、ひるがへして逆さまに見れば、又人面を成すをいふ。これ口と額の皺と鼻孔と眉間の八の字と頤鬚と髮毛と、何れとも付かずに、まきははしく畫けるより成る、『虞初新志』黃莊小傳に、上下畫とあるものこれなり。又一に圓轉圖といふ。(前頁の圖即ちこれなり)

○上古繪

黒川眞頼氏曰はく、本邦太古以來繪畫を作りて諸物の裝飾とせし中に、其のこれを施せる玉器・石器・陶器・金器等今尙土中より出づ。此等の器必太古の遺物なりや否や詳ならざれども、上古神武天皇より奈良朝まで大凡一千四百年間の物なることは疑ひなし、上古の器物は此くのごとく繪畫を作りて裝飾とせるを見る。是必ず太古の遺風なるべければ、これを以て太古の諸器物に繪畫の裝飾を施しけむことも亦推して了察せらるるなり



此の他服飾の類にも、繪畫を作りて裝飾とせしものあり。其の徴は、出雲風土記なる惠曇郷（大とも）の條に須佐能乎命の御子磐坂彦命の惠曇郷に坐す時の言に此の國の形は異軻のごとしとのたまへり、因りて其の地を畫軻といふとあり。是軻に繪をかきて裝飾とせし證なるのみならず、繪といふ言の太古にありし證なり。

繪畫を作るをカクといへり、カクといふ言に依りて思へば、繪畫を始めて作りしは、玉石金陶木竹等の器の裝飾に施したるが始なること揭焉なり。其の故はカクといふ言は、手に物を持ちて物に痕迹を留むる言なればなり。カクといふ言に従りて按ずるに、五彩を筆につけて作る所の繪畫は彫りて作る畫よりは後なり云々。詳しくは黒川真頼博士の日本繪畫沿革説を見るべし。

○障子繪

障子は、今の明り障子の事にはあらず。襖障子にして、今のからかみなり。古

畫備考に、數多障子畫を列記せり。左の如し。

賢聖障子 (古今著聞集に云く、南殿の賢聖障子は寛平の御時始めて

かゝれけるなり、其の名臣といふは、馬周、房玄齡、杜如晦、魏徵（自東）、諸葛

亮、遼伯玉、張良、第五倫（同）、管仲、鄧禹、子產、蕭何（同）、伊尹、傅說、太公望、仲山甫

（同）、李勣、虞世南、杜預、張華（自西）、羊祜、楊雄、陳寔、班固（同）、桓榮、鄭玄、蘇武、倪寬

（同）、董仲舒、文翁、賈誼、叔孫通（自西）、等なり。此の人々の影をかゝれける、彼

の麒麟閣の功臣を圖せられたる跡おはれけるにや、始めは色紙形に

銘をかゝれたり、されば道風朝臣の申文にも七度けがせるよし載せ

たり云々)

荒海障子 又萩の戸のまへなる布障子を荒海の障子と名付て手長

足長など書きたり、その北うらは宇治の網代を書けり。清少納言が枕

草子に此の障子の事も見えたり、一條院此のかたに書かれたるとこ

そ云々（古今著聞集）



昆明池障子 又清涼殿の弘庇についたち障子を立て昆明池を圖せられたり、そのうらに野を書きて片方に小屋形あり。又近衛司の鷹つかひたるを書けり。是は雜藝に侍る、嵯峨野に狩せし少將の心とぞ、彼の少將といふは、大井川のほとりにすみける季綱の少將事にや、かの大井河の家を出で嵯峨野に狩しけるを寫しけるにこそ古今著聞集

網代障子 寛和二年、清涼殿の御さうじに、あじろかける所、よみ人しらす、あしろ木にかけつゝ、あらふからにしき日をへてよするもみちなりけり拾遺集

はね馬の障子

よせ馬の障子 大かた清涼殿の唐繪にもみな書きならはせる事とも侍り、渡殿にはね馬よせ馬の障子を立てて云々古今著聞集

馬形の障子 又同じわだどのの北邊朝がれひの前に、馬形の障子侍り古今著聞集

古今著聞集 中右記天永三十九可渡御新造大炊殿也略御裝束事、藏人大膳亮説

雅、奉藏人所衆奉仕中殿、御裝束午時任勘文令立御帳略見廻所々之處、朝

干餉壺布障子皆悉畫馬形、里亭多相具打毬也、仍俄可畫具打毬圖之、山

下知繪師信貞則令畫圖了令立替禁秘御抄階梯上

李將軍射虎障子 陣の座の上に、李將軍が虎を射たる障子をよせか

古今著聞集

養由基射猿障子 校書殿には養由基が猿を射たる障子をよせたと

たり。

これみないづれの御時よりといふ事をしらす、由緒かたがたおぼつかなし同書

打毬障子 里亭朝干餉壺布障子中右記馬形障子の條に委し

年中行事障子 仁和元年、圖年中行事於障子、獻之年中行事抄

和漢尚齒會障子 安和二年、尚齒會於粟田山莊、太政大臣實賴、以和漢

尚齒會畫障子贈之日本史引略記百鍊抄文粹



遠山殘月障子 近衛院、少好圖繪、嘗繪遠山殘月於殿中北障子、  
盛衰  
名所障子 最勝四天王院、名所御障子、  
明月

以上

○寫眞繪

黒川眞頼氏は、嵯峨天皇より以來は、曼荼羅畫の方法に依りて、作り出づる畫圖多くして、上下遠近の規矩を正して作り出づることは、未だ能く熟せざりしを、百濟河成出でて、能く上下遠近の規矩に合ふ繪畫を畫がき出でたり。百濟河成は仁明天皇、文德天皇の頃の人なり、斯く云ふ徵は、文德實錄卷五に云はく、仁壽三年八月壬午、中略散位從五位下百濟朝臣河成卒、以上文とあるによりて云ふなり、河成が畫の上下を詳にし、遠近を明にして、其の寫し出す所の品物の、能く眞に迫る事の原因は、僧徒等が各信する所の高僧貴僧を寫し出だすの方法より出でて、練磨して進歩せる者なり。因に云ふ、河成は其の先は百濟國の人にて、氏は余と云へり、斯く云ふ徵

は續日本後紀卷九に云はく、承和七年六月丙寅、備中介外從五位下余河成、右京大屬正六位下余福成等三人賜姓百濟朝臣、其先百濟國人也、以上と見えたり。

斯く云ふ徵は、文德實錄卷五仁壽三年八月壬午の條に云はく、散位從五位下百濟朝臣河成卒、中略以善圖畫、屢被召見、所寫古人眞及山水草木等皆如自生、昔在宮中、令或人喚從者、或人辭以未見、顔容、河成即取一紙圖其形、或人遂驗得、其機妙如此、今之言畫者咸取則焉、以上とあるに據りて云ふなり、然るを又此の事に似て一の傳あり、其は今昔物語卷二十四百濟川成飛彈工挑語第五に云はく、今昔百濟の川成と云ふ繪師有けり、世に並無き者にて有ける、瀧殿の石も此川成が立たるなりけり、同じ御堂の壁の繪も此の川成が書たるなり、而る間、川成從者の童を逃しけり、東西を求けるに、不求得りければ、或高家の下部を雇て、語ひて云はく、己が年來つかひつる從者の童既に逃たり、此尋て捕へて得させよと、下部の云く、安き事には有れども童



の顔を知りたればこそ搦め、ど顔を不知しては何でか搦めんと、川成現に然る事なりと云て、疊紙を取出て童の顔の限を書て下部に渡して此に似たらむ童を可捕きなり、東西の市は人集る所なり、其邊に行きて可伺きなりと云へば、下部其顔の形を取て即ち市に行きぬ、人極めて多かりと云へども、此に似たる童無し、暫く居て若しやと思ふ程に、此似たる童出來ぬ其の形を取出て競ぶるに、露違たる所無し、此なりけりと搦て川成が許に將行ぬ、川成此を得て見るに、其童極く喜びけり、其比此を聞く人極き事になん云ける、而るに、其比飛驒の工と云ふ人工有けり、都遷の時の工なり、世に並無き者なり、武樂院は其工の起たれば微妙なるべし、而る間、此工彼の川成となむ各其態を挑にける、飛驒の工川成に云く、我が家に一間四面の堂をなむ起たる、御して見給へ、亦壁に繪など書て得させ給へとなむ思ふと、互に挑乍ら、中吉くてなむ戯れければ、此く云事なりとて、川成飛驒の工が家に行ぬ、行きて見れば、實に可咲氣なる小さき堂有り、四面に戸皆開た

り、飛驒の工彼の堂に入りて其の内見給へと云へば、川成延に上りて南の戸より入らむと爲るに、其戸はたと閉づ、驚き廻りて西の戸より入る、亦其の戸はたと閉ぬ、亦南の戸は開ぬ、然れば北の戸より入るには、其戸は閉て西の戸は開きぬ、亦東の戸より入るに、其戸は閉て北の戸は開きぬ、如此廻々る數度入らむと爲るに、閉開つ入る事を不得、侘て延より下ぬ、其時に飛驒工咲ふ事無限り、川成妬と思て返ぬ、其後日來を経て、川成飛驒の工が許に云遣る様、我が家に御座せ、見せ可奉物なむ有ると、飛驒の工定めて我を謀らむするなめりと思て不行か、を度々勸に呼べば、工川成が家に行き、此來れる由を云入れたるに、此方に入給へと令云む、云に隨て廊の有る遣戸を引開たれば、内に大きな人の黒み脹臈りたる臥せり、鼻き事鼻に入様なり、不思議に此る物を見たれば音を放て愕て去返る、川成内に居て、此の音を聞て咲ふ事無限り、飛驒の工怖しと思て土に立てるに、川成其遣戸より顔を差出て、耶己れ此く有けるは、只來れと云ければ、恐々づ寄て見れば



障子の有るに、早う其死人の形を書たるなりけり。堂に被謀たるが妬きに依て此くしたるなりけり。二人の者の態、此くなむ有りける。其比の物語には萬の所に此を語てなむ、皆人譽けるとなむ語り傳へたるとや文以上と見えたり。文德實錄に記する所と今昔物語に記する所とは一つ事にやあらむ。別事にやあらむ。今に於いては、詳ならずと云へども、いづれにしても、河成が寫眞繪を發明せしことは、此の二書にて明瞭なり。河成出でてより、本邦の畫風一變して、其の作り出づるもの多く眞に従ふことゝなりて、文德實錄の文に今之言畫者咸取則焉と云へるがごとく、天下の畫風皆河成に従ふ。是本邦の畫風の一變なり。

因に云ふ、今世に百濟河成の畫かく所のものと云ひ傳ふるものなきにあらず、然れども多くは信じがたきものなり。河成にさしつぎて、巨勢金岡出づ、金岡の畫も亦寫眞繪にして、河成が畫風を繼ぐものなり。

編者按ずるに、こゝに寫眞繪といふは、次條に説くところの寫世畫といふに意同じ、寫眞寫生の語、唯だ古人のいひおけるに従ふのみ、互に参照して可なり。

### ○寫生畫

中林竹洞いはく、學畫者は必寫生を爲すべきなり。物の勢を見るには、造物に若くはなし。古人の紛本は大塊の中に有りとかや。されば山水を學ぶ者は深山無人の境に遊び、禽獸を寫す者は、山野に行きて其の趣きを見、草花を畫く者は、園圃に座臥して、朝暮風露の態を考ふる類多きぞかし。范寬が終南山に居して、山林の幽趣をうかひ、黃公望が虞山に隠れて、奇樹怪石を寫し、易元結が山林に行きて、猿鹿の遊をうかひしたぐひす。なからず。皆自然の勢ひ趣きをとるにて、今時の人の寫生てふ物とは大に別なり。今やうの生寫しとは、禽獸はをりにこめ、くさりにからまれたるを、坐右に引きよせて、その毛色すがたより、いふせげなるくまゝ迄、あまさずもら



さず寫し取りて足れりと思ひて、かの物の勢、氣象といふ物は寫さず、まことに毛色形こまかき隈々まで、生の物とたがふ事なくてのち能畫とせば、能畫は誰も致すべし、いはんや籠鳥は、形ふくらかにすくみて思慮するていあり。空をかけり、枝上になく鳥は、形のびらかにして喜べる態多し人も獄中につながれたる人と、時を得て喜べる人と、顔色容貌一ツならんや。又眞山水をうつさば、山の全體をうつすべからず、眞山多くはそのまゝにて畫圖に入る物はすくなし、只一樹一石の奇なる形、山あひ谿あひの面白き所々、山頂の樹木、石上の泉などの、面白く趣ある所々を寫し置くべし、一圖をなさんとする時、處に隨ひて其の樹石を付す、甚しき多し、唐土の人の山水をうつすは皆しかなり、今時の人は、眞山の全形にのみ心を用ゆ、たがへりといふべし、されども富士山、吉野山、立田などの、名たゝる所の圖をうつさんには、其處の景を體に取るべきなり。但しあまさずもらさずかきとりたるはいやしく見ゆ、其中になくてかなはぬ所ばかりを寫してよけん、かくはいひおけど、寫生の一事は、よく古畫を熟習しての上のことと知るべし。

安西雲煙いはく、應舉寫生の工夫、其妙を得たること、本朝古今及ぶ者なし、しかれども瀑布登鯉圖を見るに、鯉魚瀑布の中にあれば登ることを得べからず、これ登鯉の本意にあらずと云ふ者あり。按ずるに此の圖、高田敬輔より出でて楫取魚彦など専ら畫く處なり。その登る處は本意にはあらず、共應舉が畫く所は、其の工夫の妙なる瀑布の中にして、形像生けるが如く眞に登るが如くに見ゆ。應舉もとより登鯉の圖を知らぬにはあらざるべけれ、其新意を出して寫せしならん、たとへば王維が袁安臥雪の宅邊に青々たる芭蕉葉に雪をつもらせしが如き、同日の談なるべし。又幽鬼の圖を寫せしに、ある婢女晚景に是を見て氣を失ひしこと、口碑に傳へたり。いづれも妙境に入らずといふことなし。其の工夫は、壯女の死せる者の面相を見て畫き初めしと云ふ。其の眞蹟を見るに、常の顔面にて眼中に意あるの



みなり、又江戸本所押上天羅山眞盛寺に、應舉が畫ける地獄變相圖あり、筆力精神の妙夢幻のうち、に地獄を見るがごとく、筆者は冥府に至りて歸りしものかと疑はる。誠に地獄の寫生なるべし。又人物花卉鳥獸蟲魚に至りても實によく生動の態をつくせり。是ぞ能く手虚を作りても又よく實とするものなり。韓非子に、客有爲齊王畫者、齊王問曰、畫孰最難者、曰、犬馬難、曰、孰易者、曰、鬼神最易、夫犬馬人所知也、且暮罄於前、不可類之故難、鬼神無形者、不罄於前、故易之也とあり。實に眼前に見る所は世俗是れを評し、上古のことは學者これを評す。鬼神にいたりては見るものなき故、圖樣定まらざれ共、又拙工の手より出でたるは、見るものの心を悚動するにいたらず。飯島虚心氏曰はく、寫生畫は、花卉人物等、すべて現物を其のまゝに寫し出だし、嘗て筆意を加へざるものをいふ。安藤廣重曰はく、寫生は、畫にあらず寫生に筆意を加ふれば、即ち畫なりと。説き得て妙なりといふべし。圓山應舉、松村吳春の徒、寫生をなし、善くこれに筆意を加へ畫となし、絶妙の域に入る。後人これを察せずして、稍もすれば寫生を專として、筆意を顧みざるものあり、惑へるも亦甚し。狩野家の畫法を子弟に教ゆるや、先づ運筆を主として、學ばしめ、運筆既に熟するの後に至り、始めて寫生を學ばしむ。これ運筆を主として寫生を後にするなり。寫生は、固よりこれ畫學家の一科として、缺くべからざるものなれど、深く拘泥して、運筆の肝要なることを忘るるなかれ。

編者いはく、前條寫眞繪と、交互參照すべし。

### ○術 畫

安西雲煙いはく、道家の方術、亦畫事に移るものあり。畫龍の風雨を起し、墨馬の野に走る、此くの如きの類、少なからず。郭若虚曰く、夫眩惑して以て名を沽る者は、鑿士之棄る所と是也。孟蜀に一術士あり、畫を能くす。蜀主遂に庭の遇に於て、野鵲一双を作らしむ。俄然衆禽集りてこれに噪ぐ。又黄筌をしてその西隅に亦野鵲一双を作らしむ。則ち集禽の異有ことなし。蜀主以



て問ふ、筌對へて曰、臣が畫く所の者は藝也、彼が能くする所の者は術也、是を以て噪禽の異を致す也と、蜀主以て然りとす。又道士陸希直の畫花に遊蜂の至る、皆畫法に於ては闕如たるなり。

因云、隋唐嘉話云、貞觀中西域より胡僧來る、太宗召之、能咒術をなす、壯士勇氣あるを咒せしむるに、故無くして立ちどころに死す、亦咒禱して忽ち蘇生す。側に傳奕なる者あつて云、是邪法なり、正に勝べからず、諸をして臣を咒せしめよ、彼術行ふべからずと、則ち故僧奕を咒す、須臾あつて胡僧卒爾に倒れ死すと、故に妖は素より正に勝べからず、異を信じて眩惑せらるるは婦女子の見といふべし、董太史云、思訓、畫一魚甫完、未施藻荇之類、有容扣門、出看尋入、失去畫魚、便童子覓之、乃風吹入池中、拾視之、唯空紙耳、後嘗戲畫數魚、投池內、經日夜終不去と、是前の一魚は無心より出るに因て感應する所なり、夜逢性石曾飲羽の等の如きと同じ、後の數魚は有意なれば感なきなり、或は有無の方便説か、又筆墨に於る、無心の狂

怪は是其人なり、若力量なくして光琳大雅の墨を擬撫するものは、亦有心の贗物にして、却て識者の觀に不堪なり。

天童按ずるに、古より花を畫きて蝶來り、馬を畫きて夜田野を荒暴し、雞を畫くに生ける雞の來りて畫雞を蹴たりといふが如き口碑の古より喧傳するところなるが、これ等は、道士賣僧等の所謂其の術畫なるか、藝の神に入りしものか、或は訛傳か、今よりは想像し難し。武江年表、明和年間記事の條にいはいく、曳尾庵云、明和安永の頃、鼠除猫の繪かゝんとて市中を歩行しは、常州の者にて名を雲友といふ。又蜀山人の一話一言を引きていはいく、天明寛政の頃百仙といへるもの、年六十にちかき坊主なり、出羽の秋田に猫の宮あり、願の事ありて猫と虎とを畫きて、社に一枚づつ奉納すといふ、自ら猫かきと稱して猫と虎とを畫て、筆を以て都下をうかれあるき、猫畫ふといひしなり。呼入れて畫かしむれば、僅の價を取りて畫く、その猫は鼠避けしといふ云々。雲友は白仙の師か、此の二



人はこれ我國の術畫師ともいふべし、惜むらくは鼠除の繪を畫くより外に術無きをされど多くの繪師の陸希直の術はもとより黃子久の藝も無くして徒に白紙白絹を塗抹するよりは勝れるか。

○春畫

屋代弘賢の其著『輪翁畫譚』に春畫のはじまりと題していはく、男女交合の圖をつくりしことは、いつの世よりやはじまりけむ、さだかに記したるものもあらざるにや、西土にては、漢人の春畫傳はれるよし、青藤山人の『路史』に見え、皇朝にては能宣集に春畫の贊見えたり、能宣朝臣は圓融院花山院の御宇の人なり、されどこれを初めとは言ひがたし、それより此かたは灌頂卷、古今著聞集の繪師賢應が弟子の師の後家が密夫會合の繪など聞えたり、此ことをこなたの詞にはおそくつといへり古今著聞集 おそくつとはおそひくつといふ詞の中略にやと、類聚名物考にはいへれど、いかがあらん、もし燭餘をほそくつなどいひしこともありけんには、陰莖の首を燭餘

にたとへていひもしけんと思はるれど、それも證據なければいひがたきにや、青藤路史云、予家有漢人畫、此世之所不見、亦世之所未知也、其畫非、楮乃畫于車畫殼上、乃是姑蘇沈辨之至山東、賣畫買回者、聞彼處盜墓人、每發一墓、則其下有數十石、其畫皆作人物、如今之春畫間有幹男色者、畫法與隸釋中有有一碑上所畫之人、大率相類、其筆甚拙云々、能宣集、但馬守ためちか、屏風にさまざまの畫かゝせて侍るに、男女けしからぬ事どもかゝれたるところに、うしろめた下のこゝろはしらすして身をうちとけてまかせたるかな、灌頂卷は、齋宮濟子女王の瀧口武者平致光といふものと密通ありしことを敷演してゑがけるものなり、木下侯に古本あり、書畫の様鎌倉時代のものとおぼし、もしこれより先き原本ありしものにや、齋宮部類記云、寛和元年九月二日癸酉、伊勢齋宮王濟子女王、自中河家禊、東河入左兵衛府、廿六日丁酉、自左兵衛府禊、鴨河入野宮云々、雖未造畢、依不可過、今月、令入也、又禊所前野有火、遣人見之葬送也、諸人恠之、廿八日己亥、夜盜入野宮、盜取侍女



衣裳、未有如此事、日本紀略、二年六月十九日丙辰、於野宮與瀧口武者平致光密通之由風聞、仍公家召神祇官令仰祭文、近四日、遂七日、祈申此事之實否略中著聞集男女會合圖、古今著聞集卷十一(畫圖部)に云く、繪師大輔法眼賢慶が弟子に、なにがしとかやいふ法師ありけり略下飯島虚心氏いはく、春畫は一に、秘戲圖、春宮圖、おそくつの畫、まくらの畫、笑ひ畫、また草紙にとうちたるを枕草紙といふ略中按ずるに古來人物を善くする者は、春畫を畫かざるなし、これ人物は、裸體より學び始むるにあらざれば、善く其の骨格を模する能はざる故なり、又人物を畫くと雖、善くその情を寫すにあらざれば、眞に逼らざるなり、春畫は人情の至極をうつせるものなれば、これをゑがきて、人情を寫さんと欲するなり、西洋畫家の人物を學ふにかならず裸體よりするも、またおなし道理なるべし、かの圓山應舉長澤蘆雪のとき、皆勉めて春畫を畫きたるなり、其畫往々世に存せり、谷文晁及び近世の菊池容齋なども畫きたり、浮世畫師に至りては、菱河師宣

を始として、長春政信、清長歌麿、北齋豐國の徒、殆ど畫かざるものなしといふも可なるべし、されば春畫は、淫猥忌むべきものなれども、人物畫家にありては、實に必用の材料なりとぞ云々。

天童按ずるに、春畫につきては喜多村信節其著嬉遊笑覽に詳述せり、又黒川氏の考古畫譜に春畫書目の散見するあれば、左に拔萃すべし。

狐にたぶらかさるゝ春畫 豊後國伊東某所藏

灌頂卷 或小柴垣草紙 住吉慶恩畫 詞後白河法皇宸翰(特に確

證あるにはあらず、推案に過ぎざるべし)

春畫 一卷 狩野元信畫 摹本博物館藏

同 一卷 岩佐又兵衛畫 竹腰山城守所藏

四十八番春畫 一卷 土佐光信畫

春畫 一卷 同畫

醍醐男色繪 一卷 筆者不明(元亨元六十八書寫訖とあり)



二十四合春畫 一卷 土佐入道久翌畫

袋法師繪詞 一卷 飛驒守惟久

同異本 一卷 住吉具慶畫

同 一卷 土佐光信畫

致光繪 灌頂卷をいふ

以上

又徳川時代に下りては柳亭種彦の好色春畫目錄一冊ありて、印行本百有餘部の解説をなせり。又徳川時代の畫工中、春畫の名手として、諸書に云爲せらるる者は、月岡雪鼎、小松屋百龜、西川祐信、この三人なれども、浮世繪師中春畫を畫かざるもの一人も無かるべし。又刊行本中名畫として稱せらるるものは、春章の呼子鳥、歌麿の歌枕、北齋の和合神、國貞の三源氏、國貞は彫刻彩色の緻密を以て、稱せらるるのみ、冷泉爲恭の阿か井の月物語等にして、又春畫はいづれも、畫工の署名無きか、或は匿名のもの

の多き中に、加茂季鷹の編纂になれる『華月帖』といへる春畫本は、十三名の畫工の筆になれるものにして、あからさまに狩野永岳、圓山應舉、村上松堂、岸良、浮田一蕙、狩野永信、河村琦鳳、土佐光文、岸岱、菱川清春、森徹山、岡本豊彦、土佐土佐守等、いづれも天保前後の京師の畫家として一流の聞へあるものの名を署したり。されど『華月帖』は影繪なり。

○書畫帖

安西雲煙いはく、書畫帖は唐土にては早くあることなり、此際にてもこれを古くは手鑑と稱し、古人の遺墨を集め珍玩せり。近時は此事都鄙に行はれ、書畫帖と呼び都鄙ともに預め帖子を製し、これを携へて四方に奔走して知ると知らざると書畫人の揮筆を乞ひ、工拙をゑらまず、只多く貪り得るをもて上計とす、この故に今の書畫人其勢に堪へずと聞えたり。向に京師の人端隆、字は文仲といひ、又春莊と號し、書を鬻くをもて業とす。詩を能くし、隱操ある人なりと云ふ、天明年中京師の大火にあひて大に零落せり、



されども春莊帖と名つくる書畫帖を懷にして、知己の諸名家に乞ひてしるさしめ、此帖はおのが別莊なりとてたのしめりと云、此事畸人傳に見えたり、これらは眞に好事なることにて又其風流をも掬すべし。

天童按ずるに、書畫帖と手鑑とは同一に視るべきものにはあらざるべし。手鑑といへば古人の手蹟を見るを本意として、色紙、短冊などよりは經切れ書簡切れなどを蒐めたる多く、これ全きものを多く蒐むるは不可能の事にて、従つてこゝに一卷の古經ありて、同好知己のもの十人ありとすれば、十箇に分割して頒ちしもの如く、眞の手蹟を見るを本旨とせしものにて野跡、佐跡などいへる語の胚胎せるは落款も印章も無き所謂手鑑中の手蹟などを見ていひ出だせる語なり書畫帖の手鑑と其趣きを異にせるは事あたらしくいはすとも誰しもうなづき得る事とおもはる、即ち書畫帖は鑑定に用ひるものといはんよりは、知己朋友或は一代の名手を蒐めて、一は書畫其のものを愛し、一は遠く所

を隔てたる師友或は世を異にせる先哲などの面影を一堂の下に髣髴たらしむる爲のものにあらずや。そは蒐まれ、安西雲煙は畸人傳中より端文仲の春莊帖のみを引き、他に書畫帖としての恰好なるものを世に照會せざる事は、彼の和漢の書畫の博識家としては、あまりに物足らぬ心地せらる。余は世の好事家の所藏せるものを見るに、多くは天保以後の者にて、それとても、二三十家の内著名の者は二三或は五六に過ぎざるもの多く、實に良き書畫帖は得難きものと覺ゆ。余の先年購求せる書畫帖は、文化十四年に長崎の通辭劉梅泉の自ら企て成せるものにて江芸閣書して『瓊瑜互見』と題せり。畫家は、岡田玉山、南湖、武清、無琴道人、文一、細川、林谷、島外、赤水、桐陰、雲室、圭齋、醉雪、秀峰、洞水、文雍、抱一、翠雲、玄對、文水、竹谷、文晁、江文龍、雲峰、細桃、女史、半水、南嶺、元吉、雲潭の二十八人、他に無款の墨竹一葉と書には蜀山の題辭をはじめとして、佐野義行、東里千之、關克明、梁川星嶺、詩禪と款して、五山、竹雨、女史、文鳳、益田勤齋、山本綠陰



淺井禎文・杉浦西涯・清人楊覺三・米庵太田錦城・勝田鹿谷・立原翠軒・鵬齋杏  
 所吉原の遊女松葉屋の粧市河寛齋糸井榕齋秋雲・多賀谷向陵・穆堂詩佛  
 の二十五人他に玉壺生なるものの跋文となり。これを以て見るに以上  
 の書家詩人畫工等の文化文政の頃盛んに書畫帖に書し又畫けるの一  
 斑を知るに足るなり。併して以上列記せる畫家中の島外洞水半水の三  
 人と書家中の秋雪穆堂跋文を書ける玉壺生(清人らし)三人の如何なる  
 者か不明なるが世の多くの書畫帖も亦過半不明の書畫家を以て充た  
 ざるる恟に隔靴搔痒のかぎりにこそ。

○白拔繪

宮武外骨氏いはく、白拔繪といふは、もとより墨摺繪の一種ではあるが、形  
 式が違ふので、白繪或は白拔繪といひ、又反對に黒繪といふ人もあつて、定  
 まつた名はない、此繪は何時頃から初まつたかといふ事も不詳であるが、  
 石摺法帖などから思ひ付いたものであつて、錦繪類の多く出るやうにな

古奴瓦土  
 於同仔尾  
 之字良濃  
 由不奈衣  
 仇派久台  
 茂子保節  
 見藻故加  
 礼射津

小倉山



田中益信画



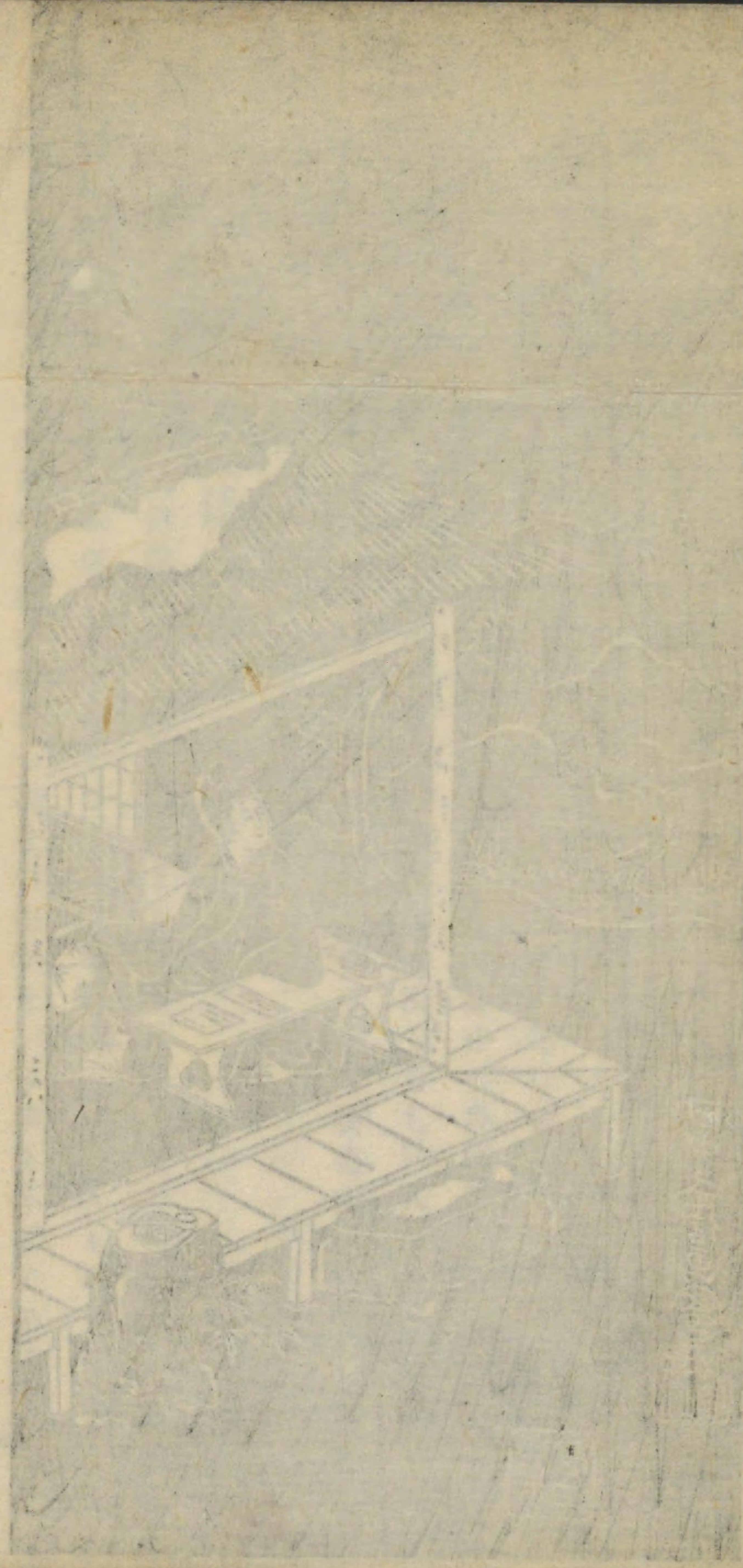


つた天明頃、アーデモナイ、コーデモナイの趣向から出来たものであらうと想像する。此の田中益信の後、北齋や廣重等の山水花鳥畫を此式で出版したものが多い。

此畫者田中益信は『裨史臆說年代記』には「黒本時代の富川房信」と肩を並べて書き、田中益信は草雙紙の畫作をあらはすとあり、『浮世繪師系傳』には「善辰齋と號す、自畫作の臭双紙多し、三馬云ふ五代目白猿の似貌上手なり」と、兩國米澤町に住し、寛延より享和頃の人なり」とあり。

○白 繪 又白描

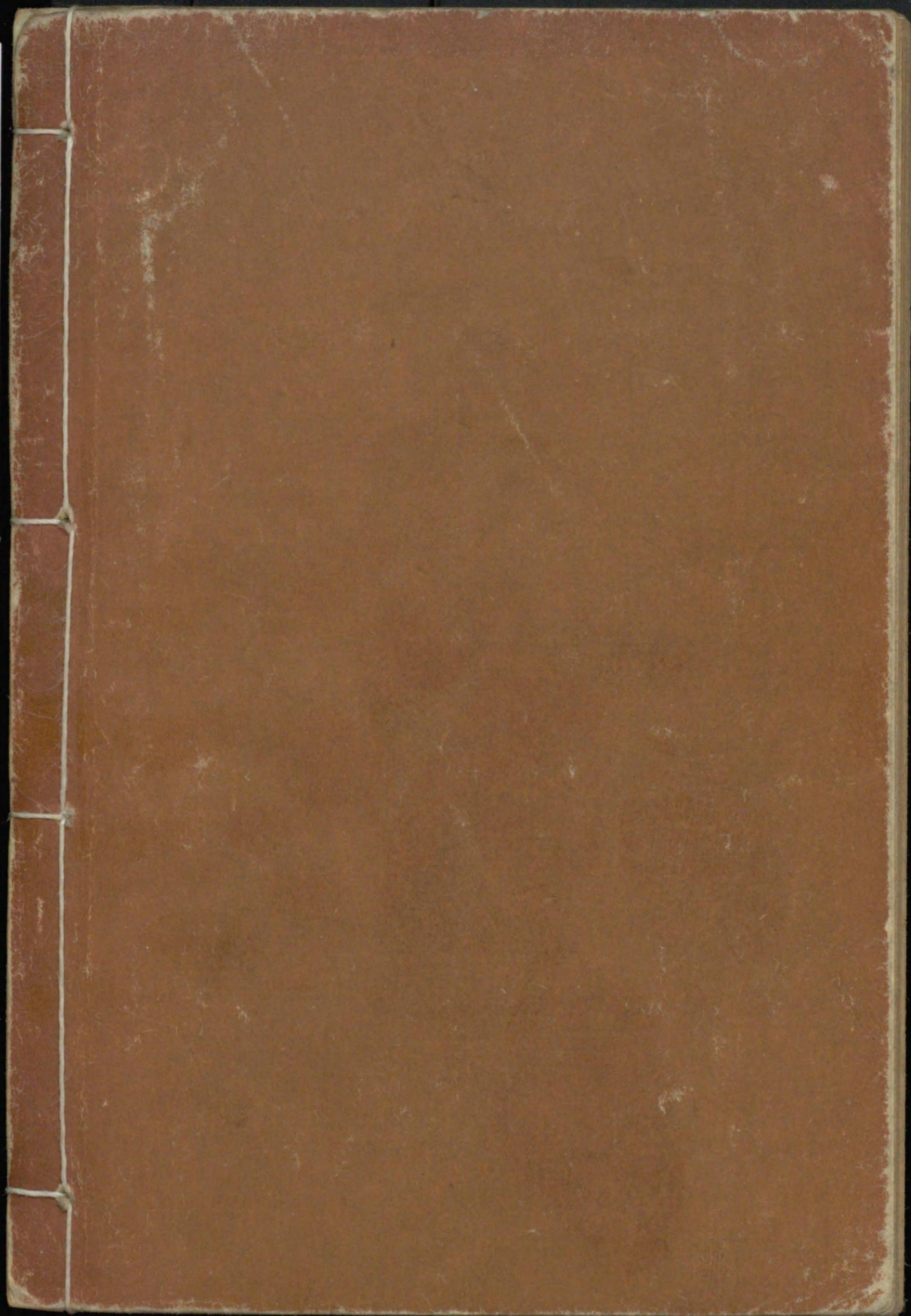
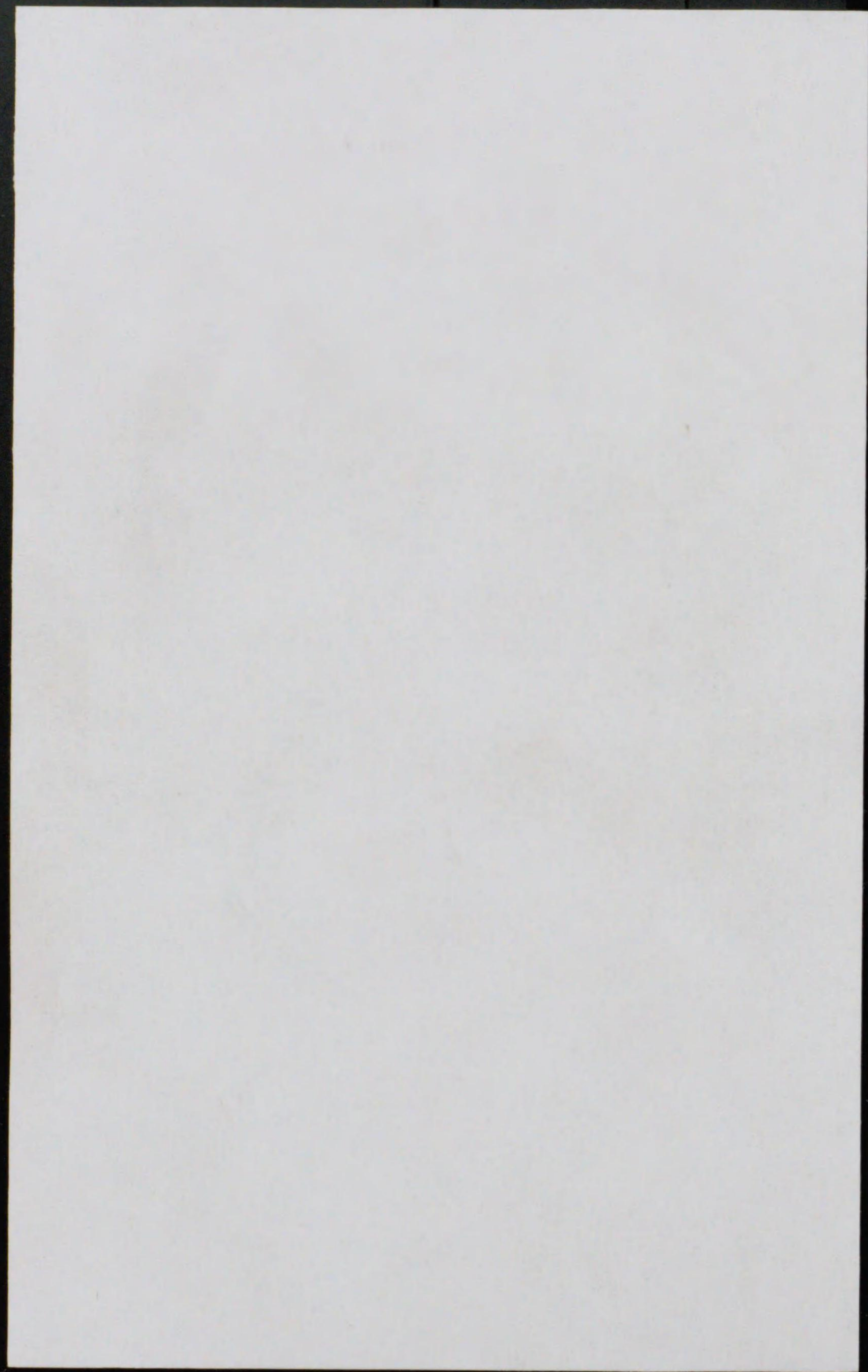
嬉遊笑覽にいはく、土佐家の繪に着色なきを白繪といふとぞ、漢土に白描といへるに似たり、榮花(初花)しらさうそくともものさま／＼なるは、たゞすみるのこちしていとなまめかしとある墨繪、件のしら繪におなし云々、嵩鶴畫談に山靜居畫論を引きて白畫と題していはく、世以水墨畫爲白描、古謂之白畫、袁蒨有白畫天女、東晉高僧像、展子虔有白畫王充像、宗少文有白













本異  
日本繪類考  
卷二三

198  
414

198-414  
\*1200901404321\*

集約濟 2冊

198  
414



